

『往生要集』講読(十二)

一 問答料簡①臨終念相まで

梯 信 暁

大文第十に、問答料簡といふは、略して十の事あり。一には極楽の依正^{えいせい}、二には往生の階位^{かいゐ}、三には往生の多少、四には尋常の念相、五には臨終の念相、六には粗心の妙果、七には諸行の勝劣、八には信毀の因縁、九には助道の資縁、十には助道の入法なり。

(1) 依正 依報と正報。過去の行いの報いとして得る果報の中、衆生の身心を正報、その身心の依り所となる環境世界を依報と言う。ここでは極楽の国土を依報、仏・菩薩を正法と言う。

(2) 階位 行位すなわち修行の階梯を指す。種々の見解があるが、大乘仏教では『菩薩瓔珞本業經』等に見える五十二位が一般的である。五十二位は、「十信(凡夫が道を求めて信を深める位)・十住(菩提心を発して本格的な修行を始める位)・十行(自らの智慧を高めてゆく位)・十回向(利他の実践を重ねる位)・十地(自利利他の実践によって不退転の境地に達した聖者が仏道を完成してゆく位)・等覺(菩薩の最高位。仏に等しい智慧と慈悲とを身につけた菩薩の修行の最終段階)・妙覺(仏の位)」を言う。十回向以下は凡夫位で、十信位を外凡位、十住〜十回向を内凡位(三賢位)とし、初地(十地の第一)以上を聖位とする。

【現代語訳】

大文第十問答料簡「問答による考察」を示す章。おおよそ十項目を立てる。第一に、極楽の国土と仏・菩薩。第二に、往生人の行位。第三に、極楽に往生する人の数。第四に、平生念仏の様相。第五に、臨終念仏の様相。第六に、煩惱まみれの凡夫の心で行う念仏によって得られる勝れた成果。第七に、念仏と諸行との優劣。第八に、念仏を信する者と誇る者との相違。第九に、念仏の実践を支える生活の拠り所。第十に、念仏の実践を支える人と聖教である。

第一に極楽の依正といふは、問ふ^①、阿弥陀仏の極楽浄土は、これいづれの身、いづれの土ぞや。答ふ。天台のいはく、「応身の仏、同居の土なり」と。遠法師のいはく、「これ報身・応土なり」と。禪法師のいはく、「これ報仏・報土なり。古旧等、あひ伝へて、みな(化土・化身なり)」といふ。これを大きに失せりとなす。『大乘同性經』によりていはく、「淨土のなかにして成仏するものは、ことごとくこれ報身なり。穢土のなかにして成仏するものは、ことごとくこれ化身なり」と。またかの『經』にのたまはく、「阿弥陀如来・蓮華開敷星王如来・竜主如来・宝徳如来等の、もろもろの如来の清淨の仏刹にして、現に得道するもの、まさに得道すべきもの、かくのごとき一切はみなこれ報身の仏なり。何者か如来の化身とならば、なほ今日の踊歩健如来・魔恐怖如来等のごときなり」と以上『安樂集』。

問ふ^②。かの仏成道したまひて、すでに久如しとかせん。答ふ。諸經に「十劫」とのたまひ、『大阿弥陀經』には「十小劫」とのたまひ、『平等覺經』には「十八劫」とのたまひ、『称讚淨土經』には「十大劫」とのたまへり。邪正、知りがたし。ただ『双卷經』の懷興師の『疏』に、『平等經』を会して^③いはく、「十八劫とは、それ小の字の、そのなかの点を闕せるなり」と。

問ふ^④。未来の寿はいくばくぞ。答ふ。『小經』に、「無量無辺阿僧祇劫」とのたまへり。『觀音授記經』にのたまへり、「阿弥陀仏の壽命、無量百千億劫にして、まさに終極あるべし。仏涅槃の後に、正法の世に住すること、仏の壽命に等しからん。善男子、阿弥陀仏の正法の滅して後に、中夜の分を過ぐして明相の出づる時に、觀世音菩薩、菩提樹下にして等正覺を成じ、普光功德山王如来と号せん。その仏の国土には、声聞・緣覺の名あることなからん。その仏の国土を、衆宝普集莊嚴と号せん。普光功德如来涅槃したまひて、正法の滅して後に、大勢至菩薩、すなはちその國にして成仏し、善住功德宝王如来と号せん。国土・光明・壽命、乃至、法の住すること、等しくして異なることあることなからん」と。

問ふ^⑤。『同性經』には「報身」とのたまひ、『授記經』には「入滅」とのたまふ。二の經の相違、諸師いかに会する。答ふ。禪禪師、『授記經』を会していはく、「これはこれ報身の、隱没の相を現するなり。滅度にはあらず」と。迦才、『同性經』を会していはく、「淨土のなかにして仏になるを判じて報となすことは、

これ受用事身なり。実の報身にはあらず」と。

問ふ^⑥。何者をか正となすや。答ふ。迦才のいはく、「衆生の起行にすでに千殊あれば、往生して土を見ることまた万別あるなり。もしこの解を作らば、諸経論のなかに、あるいは判じて報となし、あるいは判じて化となすこと、みな妨難なし。ただ諸仏の修行、つぶさに報化の二の土を感じることを知れ。『撰論』^⑦のごときには、(加行は化を感じず、正体は報を感じず)といへり。もしは報、もしは化、みな衆生を成就せんと欲すなり。これすなはち、土は虚しく設けず、行は空しく修せず。ただ仏語を信じて、経によりて専らして念ずれば、すなはち往生することを得。またすべからく報と化とを(図)度るべからず」と以上。この釈善し。すべからくもつばらにして称念すべし。勞しく分別することなかれ。

問ふ^⑧。かの仏の相好、なをもつてか不同なる。答ふ。『観仏経』に、諸仏の相好を説きてのたまはく、「人の相に同ずるがゆゑに三十二と説き、もろもろの天に勝れたるがゆゑに八十の好と説く。もろもろの菩薩のためには、八万四千のもろもろの妙相好を説く」と以上。かの仏これに准へよ。

問ふ^⑨。『双卷経』にのたまはく、「かの仏の道樹は高さ四百万里なり」と。『宝積経』にのたまはく、「道樹の高さ十六億由旬なり」と。『十往生経』にのたまはく、「道樹の高さ四十万由旬なり。樹下に獅子座あり、高さ五百由旬なり」と。

『観経』にのたまはく、「仏の身量、六十万億那由他恒河沙由旬なり」と云々。樹と座と仏身と、なんぞあひ称はざる。答ふ。異解不同なり。あるいは釈すらく、「仏の境界は大小あひ礙へず」と。あるいは釈すらく、「応仏に寄せて樹量を説き、真仏に寄せて身量を説く」と。また多くの釈あり。つぶさに述ぶべからずと。

問ふ^⑩。『華嚴経』にのたまはく、「娑婆世界の一劫を極楽國の一日一夜となす」と等いへり云々。これによりてまさに知るべし、上品中生の、宿を経て華開くるは、この間の半劫に当れり。乃至、下下生の十二劫は、この間の恒河沙塵数の劫に当れり。なんぞ極楽と名づけん。答ふ。たとひ恒沙劫を経て蓮華開けずとも、すでに微しき苦なし、あに極楽にあらずや。『双卷経』にのたまふがごとし、「その胎生^⑪のものの処するところの宮殿は、あるいは百由旬、あるいは五百由旬なり。おのおのそのなかにしてもろもろの快樂を受くること、切利天のごとし」と以上。ある師のいはく、「胎生は、これ中品・下品なり」と。ある師のいはく、「九品に撰せざるころなり」と。異説ありといへども快樂は別ならず。いかにいはんや、かの九品の経るところの日時を判すること、諸師不同なるをや。懷感・智操等の諸師は、かの国土の日夜劫数なりと許すは、まことに責むるところに当れり。ある師のいはく、「仏、この土の日夜をもつて、これを説きて、衆生をし

て知らしめたまふ」と云々。いまいはく、後の釈、失なし。しばらく四の例をもつて助成せん。一には、かの仏の身量、そこばく由旬といふは、かの仏の指分^⑫をもつて、量ねてかの由旬となせるにあらず。もししからずは、須弥山のごとき長大の人の、一毛端をもつて、その指の節となさんに似たるべし。ゆゑに知りぬ、仏の指の量をもつて仏身の長短を説かずといふことを。なんぞかならずしも、淨土の時刻をもつて華の開くる遅速を説かんや。二には、『尊勝陀羅尼經』^⑬に説くがごとし。「切利天上の善住天子、空の声の告ぐるを聞くに、(なんぢ、まさに七日ありて死ぬべし)と。時に天帝釈、仏の教勅を承けて、かの天子をして七日勤修せしむ。七日を過ぎて後に、寿命延ぶることを得たり」と取意。これはこれ、人中の日夜をもつて説けるなり。もし天上の七日によらば、人中の七百歳に当れり。仏世の八十年のうちに、その事を決すべきにあらず。九品の日夜もまたこれに同じかるべし。三には、法護所訳の『経』^⑭にのたまはく、「胎生の人、五百歳を過ぎて仏を見たてまつることを得」と。『平等覺経』^⑮にのたまはく、「蓮華のなかに化生して、城のなかにあり。この間の五百歳にして、出づることを得ることあたはず」と取意。懷感等の師^⑯、この文をもつて、この方の五百歳なりといふことを証す。いまいはく、かの胎生の歳数、すでにこの間によりて説く。九品の時刻、なんの別義ありてか、かれに同じからざらんや。四には、もしかの界によりて九品を説けりとせば、上品中生の一宿、上品下生の一日一夜は、すなはちこの界の半劫・一劫に当れり。もししかなりと許さば、胎生の疑心のものすら、なほ娑婆の五百歳を経て、すみやかに仏を見たてまつることを得るに、上品の信行のもの、あに半劫・一劫を過ぎて、遅く蓮華を開かんや。この理あるがゆゑに、後の釈は失なし。

問ふ^⑰。もしこの界の日夜の時刻をもつてかの相を説かば、かの上品は、かの國に生れをはりて、すなはち無生法忍^⑱を悟るべからず。しかる所以は、この界の少時の修行をば勝れたりとなし、かの國の多時の善根をば劣なりとなす。すでにしからば、上品の人は、この世界にして、一日より七日に至るまで、三福業^⑲を具足するに、なほ無生法忍を証することあたはざりき。いかんぞ、かしこに生れて、法を聞きてすなはち悟らんや。ゆゑに知りぬ、かの國土の長遠の時刻を経て、無生忍を悟るなり。しかも、かしこに約して、すなはち悟ると名づくるも、ここに望むれば、すなはち億千歳なり。あるいはは上上の人は、かならずこれ方便の後心の行、円満せるもの^⑳なるべし。もししからずは、諸文揜掩せん。答ふ。いまだ、かの國の多善は劣なり、この界の少善は勝れたりといふことを知らず。

問ふ⁽²¹⁾。『双卷経』に説かく、「ここにして広く徳本を殖^{たくわ}え、恩を敷き恵を施し、道禁^{どうきん}を犯することなく、忍辱し、精進し、一心し、智慧ありて、うたたあひ教化して、善を立し、意を正しくし、斎戒清浄にして一日一夜すれば、無量寿仏の国にありて、善をなすこと百歳するに勝れたり。所以^{ゆゑ}はいかん。かの仏国土は無為自然にして、みなもろもろの善を積みて毛髮の悪もなし。ここに善を修すること十日十夜すれば、他方の諸仏の国のなかにして善をなすこと千歳するに勝れたり」と以上。これその勝劣なり。答ふ。「二界の善根を剋^{くわく}対するにはしかるべし。しかも、値仏の縁勝れたれば、すみやかに悟るに失なし。あるいはこの『経』は、ただ修行の難易を顯し、善根の勝劣を顯すにはあらず。たとへば、貧賤なるもの一銭を施するをば、称美すべしといへども、しかも衆事を弁せず、富貴の千金を捨つるは称すべからずといへども、しかもよく万事を弁するがごとし。二界の修行もまたかくのごとし。『金剛般若経』⁽²²⁾にのたまへるがごとし。「仏世にして信解するをば、いまだ勝れたりとなすに足らず。滅後をば勝れたりとなす」と。あるいは余の義あり。委曲することあたはず。

問ふ⁽²³⁾。娑婆の行因に隨ひて、極楽の階位に別あるがごとく、所感の福報もまた別ありや。答ふ。大都是別なきも、細分は差あり。『陀羅尼集経』の第二にのたまふがごとし。「もし人、香華・衣食等をもつて供養せざるものは、かの淨土に生れたりといへども、しかも香華・衣食等の種々の供養の報を得ず」とこの文は、かの仏の本願に違へり。さらにこれを思釈せよ。玄一師・因法師、同じくいはく、「実に約して論ずれば、また勝劣あり。しかもその状相似せるがゆゑに好醜なしと説く」と。

問ふ。極楽世界は、ここを去ることいくばくぞ。答ふ。『経』にのたまはく、「ここより西方に、十万億の仏土を過ぎて極楽世界あり」と。ある『経』にのたまはく、「これより西方に、この世界を去ること百千俱胝那由他の仏土を過ぎて仏の世界あり。名づけて極楽といへり」と。

問ふ。二の経、なんがゆゑぞ不同なる。答ふ。『論』の智光の『疏』の意にいはく、「俱胝といふは、ここには億となす。那由他といふは、この間の垓の數に當れり。世俗にははく、十の千を万といひ、十万を億といひ、十億を兆といひ、十兆を經といひ、十經を垓といふ。垓はなほこれ大數なり。百千俱胝はすなはち十萬億なり。億に四の位あり。一には十萬、二には百萬、三には千萬、四には十萬なり。いま億といふはすなはちこれ万万なり。この義を顯さんがために那由他を挙ぐ」と以上。この釈思ふべし。

問ふ⁽²⁴⁾。かの仏の所化はただ極楽とやせん、また余ありとやせん。答ふ。『大論』

にいはく、「阿弥陀仏にもまた嚴淨・不嚴淨の土あること、釈迦文のごとし」と。問ふ。なんらかこれなるや。答ふ。極楽世界はすなはちこれ淨土なり。しかも、その穢土はいまだいづれの処なるかを知らず。ただし道綽等の諸師、『鼓音声経』の所説の国土をもつてかの穢土となす。かの『経』にのたまふがごとし。「阿弥陀仏は声聞ともなり。その国を号して清泰といふ。聖王の住むところなり。その城は縦広十千由旬なり。なかにおいて刹利の種を充滿せり。阿弥陀仏・如来・正遍知の父を月上輪聖王と名づく。その母を名づけて殊勝妙顏といふ。子を月明と名づく。奉事の弟子を無垢稱と名づく。智慧の弟子を名づけて攬光といふ。神足精勤のものを名づけて大化といふ。その時の魔王を名づけて無勝といふ。提婆達多あり、名づけて寂といふ。阿弥陀仏、大比丘六万の人ともなり」と。問ふ。かの仏の所化は、ただ極楽・清泰との二の国とのみやせん。答ふ。教文は、縁に隨ひてしばらく一隅を挙ぐ。その実処を論ずれば不可思議なり。『華嚴経』の偈にのたまふがごとし。

「菩薩もろもろの願海を修行して、あまねく衆生の心の所欲に隨ふ。

衆生の心行広くして無辺なれば、菩薩の国土も十方に遍せり」と。

またのたまはく、

「如来出現したまひて十方に遍し、一々の塵のなかに無量の土あり。

そのなかの境界また無量なるに、ことごとく無辺無尽の劫に住したまふ」と。

問ふ。如来の施化は、事孤り起りたまはず。かならず機縁に對す。なんぞ十方に遍する。答ふ。広劫に修行して無量の衆を成就したまへり。ゆゑにかの機縁、また十方の界に遍せり。『華嚴』の偈にのたまふがごとし。

「往昔に勤修したまふこと多劫海にして、よく衆生の深重の障を轉じたまへり。

ゆゑによく身を分つこと十方に遍して、ことごとく菩提樹王の下に現じたまふ」と。

(一) 第一問答 『觀無量壽經』等に説かれる阿弥陀仏と極樂国土とが法・報・應の三身三土のどれであるのかを問う。淨影寺慧遠以來議論されてきた、淨土教の基本問題の一つである。源信は、天台・遠法師・綽法師の三説を挙げるのみで私見は述べていない。天台智顛(五三八〜五九七)は、『維摩經文疏』卷一(『統藏』一・二七、四三二丁右下)に、「①凡聖共居の染淨國、②方便行人所居の有余國、③純法身大士所居の果報國、④究竟妙覺所居の常寂光土」という四種淨土の説を提示し、①②は應仏の所居、③は亦應亦報仏の所居、④は法身仏の所居

であると言う。さらに凡聖同居国を二つに開いて、凡聖同居穢土と凡聖同居淨土とを立て、西方無量寿国は凡聖同居淨土であると主張する。極楽は三界の内であり、心身仏所居の心土であると言うのである。また、智顛の著と伝わる『観経疏』は、実は八世紀の成立とされているが、そこにも類似の説が見える(『大正蔵』三七、一八八頁中)。次の遠法師は淨影寺慧遠(五三三〜五九二)を指す。淨影は『無量寿経義疏』卷上(『大正蔵』三七、九二頁上)・『観経義疏』本(『大正蔵』三七、一七三頁下)に、『観無量寿経』に登場する阿弥陀仏は、『観音授記経』所説の寿命有限の仏と同じであると見て、心身仏と判じている。最後に挙げる道綽『安樂集』卷上(『大正蔵』四七、五頁下)は、『大乘同性経』卷下(『大正蔵』一六、六五一頁中・下)の説によって、弥陀身土を報身・報土と判じている。

(2) 第二問答 阿弥陀仏成仏以来の劫数を問う。同様の議論は、新羅義寂『無量寿経述義記』(古逸、『安養集』三七五頁)・憬興『無量寿経連義述文贊』卷中(『大正蔵』三七、一五五頁上)に見える。『無量寿経』卷上(『大正蔵』一一、二七〇頁上)に、「成仏已来、凡そ十劫を歴し、『阿弥陀経』(『大正蔵』一一、三四七頁上)に、「阿弥陀仏成仏已来、今に十劫なり、『大阿弥陀経』卷上(『大正蔵』一一、三〇三頁中)には、「阿弥陀作仏已来、凡そ十劫」と言う。『平等覚経』卷一(『大正蔵』一一、二八二頁下)では、「無量清浄仏作仏已来、凡そ十八劫」とあるが、元・明本では「八」が「小」になっている。『称赞浄土経』(『大正蔵』一一、三四九頁下)には、「無量寿仏、阿耨多羅三藐三菩提を証得してより已来、十大劫を經」とある。源信は私見を述べず、憬興の説を引いて答えを結んでいる。憬興は、『無量寿経』に「十劫」と説くのは、『大阿弥陀経』の「十小劫」と同意であり、『平等覚経』の「八」の字は誤字であると言う。ちなみに源信晩年の著述『阿弥陀経略記』(『大正蔵』五七、六七七頁上)では、四悉檀の義をもって、諸経の説を教説の通りに信ぜよと述べている。

(3) 会して 「会通」すること。会通とは、経論によって教説に矛盾がある場合、いずれの説も誤りではなく、一貫した道理に裏付けられていると見て、文章表現の相違を道理に照らして説明解釈すること。

(4) 第三問答 阿弥陀仏の寿命を問う。仏身論の一課題で、無限(無終)と見れば報身、有限(有終)とすれば心身ということになる。ここでは、無終説の典拠として『阿弥陀経』(『大正蔵』一一、三四七頁上)、有終説の典拠として『観世音菩薩授記経』(『大正蔵』一一、三五七頁上)の文を挙げている。

(5) 第四問答 前項の続きで、無終・有終両説の会通を問う。道綽・迦才の説を挙げて答えるとする。道綽『安樂集』卷上(『大正蔵』四七、六頁上)は、報身

無終説に立って『観音授記経』を会通し、この経は報身の隱没相を説くのみであると言う。隱没とは、『宝性論』卷四(『大正蔵』三一、八四三頁上)に説く、報身仏の五種相(説法・可見・諸業不休息・休息隱没・示現不実体)の一つ「休息隱没」のことで、未熟の衆生に危機感を持たせるため、一時的に身を隠すことを言う。次に挙げるのは迦才『浄土論』卷上(『大正蔵』四七、八五頁中)の文である。迦才は道綽の教えを受けた人物であるが、主として撰論教学に則して淨土教を理解し、阿弥陀仏は報身と化身とに通じ、地上聖者は報身を感得し、地前凡夫は化身を見たとする。本引文では、『大乘同性経』によって阿弥陀仏を報身と判ずる道綽の見解を会通して、それは実の報身ではなく受用事身であると主張している。受用事身とは、具体的な姿として捉えることのできる仏であり、地上聖者がその能力に応じて感得することのできる仏である。この後、迦才は、阿弥陀仏は凡夫に対しては化身を現すと見、『観音授記経』や『阿弥陀鼓音声王陀羅尼経』に説く淨土は化土であると述べている。

(6) 第五問答 前項の続きで、この問題の結論を求める。源信は、迦才『浄土論』卷上(『大正蔵』四七、八五頁上)の文を挙げて、これ以上の議論は不要であると言ひ、ひたすら念仏せよ、と結んでいる。ちなみに、この問題に関して、天台『観経疏』(『大正蔵』三七、一八八頁上)には、有限説が示されている。義寂『無量寿経連義述文贊』卷中(古逸、『安養集』三九〇頁)でも有限説を採用している。源信も『阿弥陀経略記』では、「彼土の寿量はおおよそ一恒河沙数劫のみ」と言ひ、有終説を採る。

(7) 『撰論』 世親造・真諦訳『撰大乘論釈』卷十二(『大正蔵』三一、二四一頁上)。「撰大乘論釈」には、無分別智を三種に開いて、「加行・根本・後得」の三智を立てる。加行無分別智とは悟りの因となる智慧、根本無分別智とは悟りの本体、無分別後得智とは悟りを完成した後に衆生済度のために起す智慧を言う。「正体」は根本無分別智を指す。

(8) 第六問答 『観無量寿経』第八觀や『般舟三昧経』等に三十二相・八十種好と説き、『観無量寿経』第九觀には八万四千の相好と言う。その違いについて質問し、『観仏三昧海経』卷九(『大正蔵』一五、六八七頁中)の文をあげて説明している。

(9) 第七問答 『無量寿経』卷上(『大正蔵』一一、二七二頁上)、『大宝積経』卷十一(『大正蔵』一一、九六頁中)、『十往生経』(『統蔵』一・八七、二九二丁左下、『大正蔵』八五、一四〇八頁中)、『観無量寿経』第九觀(『大正蔵』一一、三三四頁中)に見える、道場樹や仏身の高さに関する諸説あつてつじつまが合わないこ

とを問題にしている。この問題は、義寂『無量寿経述義記』巻中(古逸、『安養集』三三五頁)に見え、そこには、彼土と此土では時間の速さが異なるように、長さ大きさも異なるので、仏身量の教説に大小があっても差し支えないと言う。また憬興『無量寿経連義述文贊』巻中(『大正蔵』三七、一五六頁中)には、『無量寿経』第九観には他受用身を説き、『無量寿経』には化土を説くと述べている。源信はこの両説を挙げて答えている。

(10) 第八問答 『華嚴経』(六十巻本)巻二十九(『大正蔵』九、五八九頁下)の説をきっかけに、『観無量寿経』の九品往生人が真に往生を遂げるまでに長い時間を要することを問題視し、はたしてそれで極楽と呼べるのか、と問う。まず、『観無量寿経』の蓮華内に留め置かれる云々の教説と、『無量寿経』の胎生(次項に解説)とを重ね合わせて、その間に苦を受けることがないので、極楽と言うことに不都合はないと言う。ここに「ある師」の説を一つ挙げてはいるが、前者は、新羅義寂『無量寿経連義述文贊』巻中(古逸、『安養集』三六二頁)に、「彼に生まれて胎生を受ける者は、何品の中に在るや。旧両本に依るに、みな中・下品の中に在りと説く」とある文を誤って挙げたものかと思われる。義寂は旧本すなわち『大阿弥陀経』『平等覚経』の中下輩のことを言うのであり、『観無量寿経』九品については、このあとに、「観経所説の下輩三生はこれ胎生となすやいなや。答え。非なり」と否定している。また後者は、新羅諸家に共通の説で、たとえば元暉『無量寿経宗要』(『大正蔵』三七、一三二頁中)には、「生まれて辺に著する者は、別にこれ一類にして、九品の摂にあらず」と言う。このほか、童興『観経記』(古逸、『安養集』三六四頁)、憬興『無量寿経連義述文贊』(『大正蔵』三七、一五八頁下～一五九頁中)等に見える。源信は続いて、経説の日時・劫数は彼土における数量で示されている、という説を批判する。源信はここに懐感と智憬とに言及する。智憬は奈良時代、東大寺で活躍した華嚴学者であるが、詳細は分からない。懐感『群疑論』巻七(『大正蔵』四七、七二頁下～七二頁上)では、娑婆の衆生に説くことから此土の劫数を示している、という説を否定し、彼土の劫数が示されていることを主張している。源信は、懐感が否定した説を挙げ、これが正しい、と言うのである。ちなみに善導『観経疏』散善義(『大正蔵』三七、二七四頁中～下)には、「七日と言ふは、恐らくは此間の七日ならん」と言い、良源『九品往生義』(『仏全』二四、二五七頁下)には、「これ彼土の劫数ならん」と言う。源信は善導説を支持し、良源説を否定していることになる。

(11) 胎生 『無量寿経』巻下(『大正蔵』一一、二七八頁上)に説く。仏智を疑いつつ往生を目指す者は、「胎生」の形で極楽に生まれ、五百年の間、三宝を

見ることがも供養することも善行をなすこともできないと言う。極楽の辺地、あるいは疑城胎宮なども言う。

(12) 指分 指の長さ。「由旬(yojana)」は距離の単位で、牛が車を引いて一日に行く行程を指す。一由旬は約七キロメートル、あるいは一四、四キロメートルとも言う。指や手の長さを基準とする長さの単位としては、「指節(anguliparvan)」「揅手(vriastu)」「肘(hasta)」などがある。一揅手は、親指と中指をいっぱい張った長さを言い、一説に、十二指節を一揅手、二揅手を一肘とすると言う。「由旬」は指の長さとは無関係かとも思われるが、一由旬を一万余六千肘とする説などもある。すると、「一由旬」は「二万六千×二十四指節」ということになる。「観無量寿経」第九観には、「仏身高六十万億那由他恒河沙由旬」と説くが、それを浄土における長さの単位で表した数字だとすると、仏の「二指節」は身長が「六十万億那由他恒河沙×二万六千×二十四」分の一ということになり、身長からみればほんの毛先ほどの長さになってしまふ、と言うのである。

(13) 『尊勝陀羅尼経』 『仏頂尊勝陀羅尼経』(『大正蔵』一九、三五〇頁上)取意。

(14) 法護所訳の『経』 ここでは『無量寿経』巻下(『大正蔵』一一、二七八頁中)を指す。次に引用される憬興『無量寿経連義述文贊』では、「魏の時帛延、無量清浄平等覚経の号を顕し、呉の時支謙、諸仏阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道経の称を立て、また大阿弥陀と名づけ、今西晋の法護、無量寿経と名づく」(巻上、『大正蔵』三七、一三二頁下)と言う。

(15) 『平等覚経』 『平等覚経』巻三(『大正蔵』一一、二九二頁上～中)。

(16) 憬興等の師 憬興『無量寿経連義述文贊』巻下(『大正蔵』三七、一六九頁中)。

(17) 第九問答 前項の続きで、経説の時間は彼此いづれを基準とするかを論じている。問者は彼土説に立ち、源信はそれを否定する。

(18) 無生法忍 空を悟って心が安定する境地。一切はみな空であり、固有の实体を持たず、よって生滅変化を超えているという道理を受け入れて、心が安定することを言う。聖者の境地である。

(19) 三福業 『観無量寿経』序分に説く三つの善行で、「一には父母に孝養し、師長に奉事し、慈心をもって殺さず、十善業を修す。二には三福を受持し、衆戒を具足し、威儀を犯さず。三には菩提心を発し、深く因果を信じ、大乘を誦誦し、行者を勧進す」(『大正蔵』一一、三四一頁下)を指す。古来、九品往生人所修の行は三福に収まると考えられている。

(20) 方便の後心の行、円満せるもの 凡夫位で行うべき修行が完成している人。方便後心行とは、利他行のことで、十回向位で行う修行を指す。上品上生人は、十行・十回向の行を完成し、往生後即座に初地無生法忍を悟る人だと言っている。

(21) 第十問答 前項を承けて、彼此における修行の勝劣を議論する。問者は『無量寿経』巻下(『大正蔵』一一、二七七頁下)を引いて、此土の修行が勝れていると言う。源信はそれを否定し、仏に値遇する縁によって即座に悟るのだと言う。

(22) 『金剛般若経』 羅什訳『金剛般若経』(『大正蔵』八、七五〇頁中) 取意。

(23) 第十一問答 往生人の階位に応じて往生後の得益に優劣の差別があるのかどうかを問い、源信は、細かい差はあるかもしれないが、大差はないと答えている。『陀羅尼集経』巻二(『大正蔵』一八、八〇〇頁中)には、娑婆において供養しなかった者は往生後供養を受けられないとあり、因行に報いて感果に差別があるようだが、それでは供具や衣服が意のままに入るようにと誓われた本願(第二四・三十八願)と相違すると言い、玄一『無量寿経記』(『続蔵』一・三二、一九八丁左下)に引用された「因法師」の説を挙げている。因法師は新羅の合因(靈因)を指すかと言われるが詳細は分からない。

(24) 第十二・十三問答 娑婆と極楽との距離について、羅什訳『阿弥陀経』(『大正蔵』一一、三四六頁下)と玄奘訳『称赞浄土経』(『大正蔵』一一、三四八頁下)の記述が相違することを取り上げ、智光『無量寿経論釈』巻二(古逸、『安養集』二四〇頁)に見える会通説を紹介している。同様の議論が義寂『無量寿経述義記』巻中(古逸、『安養集』一三九頁)に見える。

(25) 第十四・十五・十六・十七問答 第十四問答に、阿弥陀仏に極楽以外の国土があるのか、と問いを発し、浄土と穢土があるという『大智度論』卷三十二(『大正蔵』二五、三〇二頁下)の説を示す。次いで十五問答で、その穢土の例として『鼓音声王陀羅尼経』(『大正蔵』一一、三三二頁中) 所説の清泰国を挙げ、道綽『安養集』巻上(『大正蔵』四七、六上)の説を紹介する。清泰国のことは、『安養集』のほか、竜興『観経記』巻上(古逸、『安養集』四六五頁)、迦才『浄土論』巻上(『大正蔵』四七、八四頁下)、懷感『群疑論』卷六(『大正蔵』四七、六三頁下)等に見える。ただし源信は「阿弥陀仏の穢土」という考え方には賛同できないように見受けられる。そこで第十六問答では観点を変え、菩薩・如来は一切処に遍満するので、その国土も無限であると説く、『華嚴経』の偈を二つ(八十卷本の卷七・五、『大正蔵』一〇、三五頁中・二二二頁中) 引用する。源信は

その見解を支持し、補強のために第十七問答を設けて、更に『華嚴経』の偈(八十卷本の卷五、『大正蔵』一〇、二五頁上)を引用している。

【現代語訳】

第一に、極楽の国土と仏・菩薩について。

問う。阿弥陀仏の極楽浄土は、どのような身体の仏のまします、どのような国土なのか。

答え。天台大師は、「心身仏のまします、同居の浄土である」と言い、淨影寺慧遠は「心身仏のまします、心土である」と言う。道綽は、「阿弥陀仏は報身仏、極楽は報土である。古来学者は化土・化身と伝承してきたが、それは大きな誤りである。『大乘同性経』によると、浄土において成仏する仏はみな報身であり、穢土において成仏する仏はみな化身である。『大乘同性経』には次のように説かれている。(阿弥陀如来・蓮華開敷星王如来・竜王如来・宝徳如来等、清らかな仏の世界において、現に悟りを完成した仏や、やがて悟りを完成される仏は、すべてみな報身仏である。化身はと言うと、現在の跏趺健如来・魔恐怖如来等である。)」と言う以上『安養集』による。

問う。阿弥陀仏が成仏されてから、どれほど長久の時が経つのか。

答え。多くの経に「十劫」と言い、『大阿弥陀経』には「十小劫」、『平等覚経』には「十八劫」、『称赞浄土経』には、「十大劫」と言う。いずれが正しいのかわからない、懐興の『無量寿経連義述文贊』に、『平等覚経』の説を会通して、「十八劫とあるのは、小の字の真ん中の一画を欠いた誤字である」と言う。

問う。未来の寿命はどれほどか。

答え。『阿弥陀経』には、「無量無辺阿僧祇劫」と言う。『観音授記経』には次のように言う。「阿弥陀仏の寿命は無量百千億劫であり、当然終わりががある。阿弥陀仏が入滅された後、仏の寿命に等しい期間は、その教えが正しく世に伝えられるだろう。その教えが伝わらなくなった後、夜の明けるところに、観世音菩薩が菩提樹の下で悟りを開き、普光功德山王如来と名乗られるであろう。その仏の国土には、声聞・縁覚など小乗の行者はいない。その国を衆宝普集莊嚴と名づける。普光功德山王如来が入滅され、その教えが正しく伝わらなくなった後、大勢至菩薩がその世界で成仏し、善住功德宝王如来と名乗られるであろう。その仏の国土の様子や仏の光明・寿命、さらには教えが正しく伝わる期間なども、みな前の仏と同じである」と。

問う。『大乘同性経』には報身と言ひ、『観音授記経』には入滅すると言ひ。そ

の食い違いを諸師方はどのように会通されるのか。

答え。道綽は、『観音授記経』を会通して、「この経には報身仏が仮に身を隠される様子を説くのであり、本当に入滅されるのではない」と言う。迦才は、『大乘同性経』を会通して、「浄土において成仏する仏を報身仏と言うのは、受用事身のことであり、実の報身ではない」と言う。

問う。どの説が正しいのか。

答え。迦才が次のように言う。「人々の実践は様々であるので、往生して浄土を見ることにもまた様々な違いがある。そう考えれば、経論の中に報土と言うものと、化土と言うものがある。そう考えれば、経論の中に報土と言うものは、報土と化土の両方を感得するためのものと理解すればよい。『撰大乘論釈』などには、〈加行無分別智によって化土を感得し、正体無分別智によって報土を感得する〉と言う。報土も化土も、みな人々を悟りへと導こうという仏の思しめしである。いずれの浄土も無意味に示されたものではなく、いずれの修行も無意味に行うものではない。ただ仏の言葉を受けいれ、経説の通り、ひたすら念ずれば、すみやかに往生することができる。報土だ化土だと、勝手な考えをめぐらしてはならない」と。この解釈が良い。ひたすら名を称え仏を念ぜよ。あれこれ考えるな。

問う。阿弥陀仏の相好が経によって異なるのはなぜか。

答え。『観仏三昧海経』に諸仏の相好について、「人の姿との対比で三十二相を説き、神々よりも勝れていることを示すために八十種好を説く。菩薩方のために八万四千の種々のすばらしい相好を説くのである」と言う。阿弥陀仏についても同様に考えればよい。

問う。『無量寿経』には、「阿弥陀仏の道場の樹は高さ四百万里である」と説き、『大宝積経』には、「道場の樹は高さ十六億由旬である」と言う。『十往生経』には、「道場の樹は高さ四千万由旬で、樹の下に仏の座を設けられ、その高さは五百由旬である」とあり、『観無量寿経』には、「仏の身長は六十万億那由他恒河沙由旬である」と言う。樹と仏座と仏身と、大きさが釣り合わないのはなぜか。

答え。様々な見解がある。ある師は、「仏の世界では大小の違いは差し支えない」と言い、ある師は、『無量寿経』では応身仏に合わせて樹の高さを説き、『観無量寿経』では真身の仏の身長を説いている」と言う。ほかにも多くの解釈があって詳説できない。

問う。『華嚴経』には、「娑婆世界の一劫が極楽国の一昼夜に当たる」と言う。これによって『観無量寿経』を見ると、上品中生に、一晩で蓮華が開くと説くが、

それは娑婆の時間に換算すると半劫もかかることになり、下品下生に、蓮華の中に十二劫のあいだ留め置かれると説くのは、娑婆の時間では恒河沙劫にもなる。それでどうして極楽と呼べるのか。

答え。たとえ長い間、蓮華が開かないとしても、苦しみは微塵もない。どうして極楽ではないなどと言えよう。『無量寿経』には、「胎生の者が留め置かれる宮殿は、百由旬あるいは五百由旬もの大きさと、切利天と同様の快樂を受ける」と言う。これについて、ある師は、『無量寿経』の胎生は『観無量寿経』の上品・下品に当たる」と言い、ある師は、「胎生は九品のいずれにも含まれない」と言う。諸説あるが、快樂を受けるということについては異論がない。

加えて『観無量寿経』の九品人が蓮華内に留め置かれる日時についても、諸師の見解はまちまちである。懐感や智懐らの諸師が、経には極楽における日時・劫数が示されているという説を認めているが、それは大いに非難すべきことである。ある師は、「仏は人間界の時間に基づいて説き示し、人間界の人々を導かれるのである」と言う。この説が正しい。以下に四つの例を挙げて証左としよう。

第一に、阿弥陀仏の身長が何々由旬と説くのは、極楽の仏の指の長さを基準として測った由旬ではない。でなければ、身長が須弥山ほどある人の、「一指節」が毛先ほどの長さしかないというようなことになってしまう。よって仏の指の長さを基準として、仏の身長を示したのではない、ということも明白である。浄土の時間によって蓮華の開くまでの時間を示した、と見る必要はなからう。

第二に、『尊勝陀羅尼経』に、「切利天の善住天子が、天空からの声で、〈お前はあと七日で死ぬだろう〉と告げられた。そのとき切利天の主、帝釈天は、釈尊の指示を承け、善住天子に七日間仏道修行をさせたところ、七日後に寿命を延ばすことができた」と言う。この七日は、人間界の日夜によって説くものである。もし天上界の七日だったら、人間界の七百年にあたり、釈尊の八十年の生涯の中で決着がつかない。九品往生段の日夜も同じはずである。

第三に、法護訳『無量寿経』には、「胎生の人は五百年後に仏を見ることができると言い、『平等覚経』には、「蓮華の中に化生して、城の中に留め置かれる。その期間は五百年で、城から出ることはできない」と言う。懐輿らがこの文を検討し、人間界の五百年であるということを立証している。今これに加えて述べる、胎生の期間は人間界の時間で説き示しているのだから、九品往生段の時間を違った基準で示すということの特別の理由は見当たらないではないか。

第四に、もし極楽の時間によって九品往生段が説かれているとするならば、上品中生の一晩、上品下生の一昼夜は、人間界の半劫、一劫に当たる。とすると、

仏智を疑惑する胎生の者でさえ人間界の五百年を経てすみやかに仏を見ることができなのに、上品の信と行とを備えた者の蓮華が開くまでに、半劫・一劫もの時間がかかるはずがなからう。以上のような理由で、人間界の時間を示すという説が正しい。

問う。もし人間界の日時によって九品往生の様子が説かれているとするならば、上品上生人は極楽に生まれてすぐに空の境地に入ることはできない、ということになる。なぜなら、人間界における短期間の修行は、極楽における長期間の善行よりも勝れていると言われているからである。とすると、上品上生人は人間界において一日から七日の間、三つの善行をすべて行うけれども、空を悟ることはできない。どうして極楽に往生して教えを聞いてすぐに悟ることなどできよう。よって、極楽において長い時間を経たのちに空を悟るのだということが分かるだろう。しかも、極楽において即座に悟ると言っても、人間界の時間では何億年もかかるのである。あるいは上品上生人は、凡夫位の修行が完成した人だということだろう。でなければ、経説に矛盾を生ずることになる。

答え。極楽の多善が劣り、人間界の少善が勝れているなどという説は聞いたことがない。

問う。『無量寿経』に言う。「人間界において様々な善行を積み、施しによって人を助け、規範を守り、困難を耐え忍び、努力し、心を研ぎ澄まし、智慧を磨き、さらには互いに教え合い、善を行い、心を正し、規範を守って清らかな生活を一日夜でもすることができれば、極楽において百年間善を行うよりも勝れている。なぜなら、極楽は人為を越えた涅槃の世界であり、皆が善を行い、悪など微塵もない。人間界で十日間善を行うならば、仏の国で千年間善を行うよりも勝れている」と。ここに勝劣が説かれている。

答え。人間界と極楽とにおける善の価値を比較すると、そうなるだろう。その上で、仏に出会うことの縁が勝れているので、往生後に即座に悟るということには矛盾はない。あるいはこの経説は、彼此における修行の難易を言うもので、善の価値の勝劣を言うのではないとも考えられる。貧しい者が一銭を施せば褒められるが、それでは大したことはできない。金持ちが千金を施しても褒められないが、大変役に立つ、というようなことだ。彼此の修行もそういうことだ。『金剛般若経』に、「仏の在世中にその教えを聞いて理解することは、さほど勝れたこととは言えない。入滅の後に理解できればすばらしいと言える」と言うようなことだ。ほかの解釈もあるが、ここでは詳述できない。

問う。娑婆における修行の優劣に随って、極楽往生人に三輩九品の階位がある

ように、往生後に受ける福德にも差別があるのか。

答え。大きな差別はないけれども、細かい違いはある。『陀羅尼集経』巻二に、「香・花、衣服や食事を差し上げなかった者は、浄土に生まれても香・花、衣服・食事を献げられることはない」と言うようにしかしこの文は、阿弥陀仏の本願の趣旨と合致しない。再考せよ。玄一師や因法師は、次のように言う。「実際には勝劣があるのだが、姿はよく似ているので、美醜というほどの違いはないと説かれるのである」と。

問う。極楽世界はこの娑婆世界からどれほど離れたところにあるのか。

答え。『阿弥陀経』には、「ここから西方、十万億の仏土を過ぎた先に極楽世界がある」と言い、『称赞浄土経』には、「ここから西方、百千俱胝那由他の仏土を過ぎた先に極楽という世界がある」と言う。

問う。右の二経の所説は、なぜ異なっているのか。

答え。智光の『無量寿経論釈』に次のような意味の記述がある。「俱胝は億と訳す。那由他は垓に当たる。一般に千の十倍を万と言ひ、十万を億と言ひ、十億を兆と言ひ、十兆を経と言ひ、十経を垓と言ふ。垓は莫大な数である。百千俱胝は十萬億に当たる。億には、〈十萬・百萬・千萬・万萬〉の四種類の意があるが、ここに言う億は〈万萬〉の意である。それを言わんとして、〈万万〉という意味の〈那由他〉という数を併記したのである」と。この釈を参考にして考えてみよう。

問う。阿弥陀仏の教化される世界は、極楽だけか。ほかにもあるのか。

答え。『大智度論』に、「阿弥陀仏の教化される世界には、清らかな場所と穢れた場所とがある。釈迦牟尼仏と同様である」と言う。

問う。それはどのような世界なのか。

答え。極楽世界が清らかな国であることは言うまでもない。阿弥陀仏のまします穢土がどこにあるのか、私は知らない。ただ、道綽等の諸師は、『鼓音声王陀羅尼経』に説く国土を阿弥陀仏の穢土と見ている。『鼓音声王陀羅尼経』には次のように言う。「阿弥陀仏は声聞の修行者と共にまします。その国を〈清泰〉と呼ぶ。転輪聖王の住む国である。城郭は縦横一万亩の広さで、王侯貴族で溢れている。阿弥陀仏の父は月上転輪聖王、母は殊勝妙顏という。子息は月明、常隨の弟子は無垢称、智慧第一の弟子は攬光、神足第一の弟子は大化、魔王は無勝、提婆達多は寂という。阿弥陀仏は六万の大比丘とともにまします」と。

問う。阿弥陀仏の教化される世界は、極楽と清泰の二国のみか。

答え。経の文は、縁によって一端を示されたものである。真実の全てを求めても、我らの考えの及ぶところではない。『華嚴経』の偈に歌われている通りであ

や。いはんや、かの後の釈に、すでに十信以前の凡夫を取りて上品の三となせるをや。また『観経』の善導禪師の「玄義」に、大小乗の方便以前の凡夫をもつて九品の位を判じて、諸師の所判の深高なることを許さず。また経論は、多く文によりて義を判ず。いまの『経』の所説の上の三品の業を、なんぞかならずしも執して深位の行となさんや。

問ふ⑥。もししからば、かしこに生じて、早く無生法忍を悟るべからず。答ふ。天台には二の無生忍の位あり。もし別教の人ならば、歴劫修行して無生忍を悟り、もし円教の人ならば、乃至、悪趣の身にしてまた頓に証するものあり。穢土なほしかなり、いかにいはんや浄土をや。かの土の諸事をば、余処に例することなかれ。いづれの処にか、一切の凡夫、いまだその位に至らざるに、つひに退墮することなく、いづれの処にか、一切の凡夫、ことごとく五神通を得て妙用無礙ならんや。証果の遅速、例してまたしかるべし。

問ふ。上品生の人の、得益の早晚は一向にしかるか。答ふ。『経』のなかにはしばらく一類を挙ぐるなり。ゆゑに慧遠和尚の『観経の義記』にいはく、「九品の人の、かの国に生れをはりて、益を得る劫数は、勝れたるによりて説く。理またこれに過ぎたるものもあるべし」と取意。いまいはく、ひろく九品を論せば、あるいはまた少分これよりすみやかなるものもあるべし。

問ふ。『双卷経』のなかに、また弥勒等のごとき、もろもろの大菩薩の、まさに極楽に生ずべきあり。ゆゑに知りぬ、『経』のなかの九品の得益は劣なるによりてしかも説けるなり。いかんぞ「勝れたるによる」とはいふや。答ふ。かの国に生れてはじめて無生を悟る、前後・早晚に約して、これを「勝れたるによる」といふなり。さらにかの上位の大士をば論せず。しかも、かの大士、九品のなかにおいて撰と撰とを、別に思扱すべし。

問ふ⑦。もし凡下の輩もまた往生することを得ば、いかんぞ、近代、かの国土において求むるものは千万なるも、得ることは一二もなきや。答ふ。緯和尚のいはく、「信心深からずして、存せるがごとく、亡せるがごときゆゑに。信心一ならずして、決定せざるがゆゑに。信心相續せずして、余念間つるがゆゑに。この三、相応せざるものは、往生することあたはざるなり。もし三心を具して往生せずといはば、この処あることなからん」と。導和尚のいはく、「もしよく上のごとく念々相續して命を畢ふるを期となすものは、十はすなはち十生ず、百はすなはち百生ず。もし専を捨てて雑業を修せんと欲するものは、百にして時に希に一二を得。千にして時に希に三五を得」と上のこと「といふは、礼・讚等の五念門、至願等の三心、長時等の四修を指すなり。

問ふ⑧。もしかならず命を畢ふるを期となさば、いかんぞ、感和尚の、「長時・短時、多修・少修、みな往生することを得」といへるや。答ふ。業類一にあらざるがゆゑに、二の師ともに過なし。しかも、命を畢ふるを期となして、勤修して怠ることなくは、業をして決定せしむるに、これを張本となす。

問ふ⑨。『菩薩処胎経』の第二に説かく、「西方にこの閻浮提を去ること十二億那由他して懈慢界あり。国土快樂にして、倡妓染を作り、衣被・服飾・香華をもつて莊嚴せり。七宝転開の床あり。目を挙げて東を視れば、宝床随ひて転ず。北を視、西を視、南を視るにもまたかくのごとく転ず。前後に意を発せる衆生の、阿弥陀仏国に生れんと欲するもの、みな深く懈慢国土に着して、前進して、阿弥陀国に生ることあたはず。億千万の衆、時に一人ありてよく阿弥陀仏の国に生ず」といふ。この『経』をもつて准するに、生ずることを得べきこと難し。答ふ。『群疑論』に、善導和尚の前の文を引きて、この難を釈して、またみづから助成していはく、「この『経』の下の文にのたまはく、へなにをもつてのゆゑに。みな懈慢によりて執心牢固ならず」と。ここをもつて知りぬ、雑修のものは執心不牢の人となすなり。ゆゑに懈慢国に生ず。もし雑修せずして、もつばらにしてこの業を行せば、これすなはち執心牢固にして、さだめて極楽国に生ぜん。乃至、また報の浄土に生るものはきはめて少なし。化の浄土のなかに生るもの少なからず。ゆゑに経に別に説けり。実には相違せず」といふ。

問ふ⑩。たとひ三心を具せずといへども、命を畢ふることを期せずといへども、かの一たび名を聞くすら、なほ仏になることを得。いはんやしばらくも称念する、なんぞ唐捐ならんや。答ふ。しばらくは唐捐なるに似たれども、つひには虚設ならず。『華嚴』の偈に、経を聞くものの、転生の時の益を説きてのたまふがごとし。

「もし人、聞くに堪任せるものは、大海および、

劫尽の火のなかにありといへども、かならずこの経を聞くことを得」と「大海とは、これ竜界なり。

釈していはく、「余の業によるがゆゑにかの難処に生る。前の信によるがゆゑにこの根器を成せり」と云々。『華嚴』を信するもの、すでにかくのごとし。念仏を信するもの、あにこの益なからんや。かの一生に悪業を作りて、臨終に善友に遇ひて、わづかに十たび仏を念じて、すなはち往生することを得。かくのごとき等の類は、多くこれ前世に、浄土を欣求してかの仏を念せるものの、宿善うちに熟していま開發するのみ。ゆゑに『十疑』にいはく、「臨終に善知識に遇ひて十念成就するものは、ならびにこれ宿善強くして、善知識を得て十念成就するなり」

と云々。感師の意もまたこれに同じ。

問ふ^⑩。下下品の人、もし宿善によらば、十念生の本願、すなはち名ありて実なからん。答ふ。たとひ宿善ありとも、もし十念なくは、さだめて無間に墮ち、受苦窮まりなからん。明らけし、臨終の十念これ往生の勝縁なり。

(1) 第一・二・三・四問答 凡夫往生の可否を論じている。まず第一問答に、『瑜伽師地論』巻七十九(『大正蔵』三〇、七三六頁下)の説を挙げ、凡夫往生を論ずることに意味はあるのかと問う。『瑜伽師地論』に言う「第三地」は、五十二位の第三発光地ではなく、七地門の第三清淨勝意樂地を指す。五十二位の初歡喜地に当たる。これに答えて、懷感『群疑論』巻二(『大正蔵』四七、三八頁下)と道宣の釈(実は道世『法苑珠林』巻十六、『大正蔵』五三、四〇六頁上の記述である)を引用する。浄土には優劣があり、地上聖者は報身報土を感得するが、凡夫向けの浄土もあるということである。第二問答では、凡夫向けの浄土などあるのかと問い、天台『維摩疏』(『維摩經略疏』巻一、『大正蔵』三八、五六四頁中)より、極樂は凡夫にも往生可能とする説を引用する。第三問答では、『弥勒問經』(古逸、迦才『浄土論』巻中、『大正蔵』四七、九一頁下等に引用)を挙げて、凡夫は往生できないのではないかと問い、『西方要決』(『大正蔵』四七、一〇五頁中)より、娑婆を厭い浄土を願う心はもはや煩惱具足の凡夫の心ではない、という説を引用している。第四問答では、極樂に往生した者は皆不退轉の菩薩だと言われるので、凡夫の往生する処ではないのではないかと問い、不退轉には多義ありと言い、「四不退」を説く『西方要決』(『大正蔵』四七、一〇七頁上〜中)の文を挙げている。ここに「十住毘婆沙にはく」として引用される文は『十住毘婆沙論』には見えないが、迦才『浄土論』巻上(『大正蔵』四七、八六頁下〜八七上)にも類似的記述がある。彼らは極樂を「処不退」と見ている。源信はその説を踏襲するものと思われる。

(2) 無功用 功用(身・口・意の意識的所作)を要せずに、自然と菩薩行を遂行できる境地。

(3) 天のなかに果を得れば、すなはち不退を得る 普光の『俱舍論記』巻十九(『大正蔵』四一、二九七頁中)に、「不退にまた三あり。一に処に因る不退。鈍根の異生、天中に在るが如し。二に姓に因る不退。利根の聖人の如し。三に位に因る不退。すでに忍を得る諸の異生の類の如し。まさに知るべし、天授と菩薩とは、これ利根種姓の不退なりといえども、人中に在ってまた未だ忍を得ざるに由るが故に、退あるなり」とある。四不退の説は、あるいはこの文が手がりとなっ

たのかもれない。

(4) 第五問答 『観無量寿經』九品人の行位を判ずる諸説を列挙して、我らの分際はどこにあるかと問い、下品人あるいは十信以前の凡夫であると答える。列挙された諸説の典拠として、淨影『観經義疏』末(『大正蔵』三七、一八二頁上〜中)、懷感『群疑論』巻六(『大正蔵』四七、六七頁下)、龍興『観經記』巻下(古逸、『安養集』二二〇〜二二三頁)等が指摘されている。ただし源信が採用するのは善導『観經疏』玄義分(『大正蔵』三七、二四七頁下〜二四九頁中)に提示された、いわゆる「九品唯凡」の立場である。『往生要集』の中、善導『観經疏』への言及はここ一箇所のみで、源信が『観經疏』の本文を見ていたかどうかは疑わしいと言われている。当時叡山には善導『観經疏』は伝わっていなかったとも言われる。では源信は何によって善導の九品唯品説を知ったのが問題となる。思うに善導『観經疏』はすでに奈良時代に伝来し、八世紀半ば以降に頻繁に書写されている。文証は得られないが、源信が南都の学僧から『観經疏』についての情報を得ていた可能性は高い。また『往生要集』には、善導『往生礼讚』『観念法門』は屢々引用されているので、善導の立場について源信が一定の理解をしていたことは確かである。

(5) 第六・七・八問答 往生の後、無生法忍を得るまでの時間について論じている。第六問答では、九品がみな凡夫なら、經説のように即座に無生法忍を得ることは不可能だろうと問い、極樂は特別であると答える。第七問答では、經に説く無生法忍を得るまでの時間は、だれでも同じかと問い、優れた者を基準として説かれると言う淨影『観經義疏』(『大正蔵』三七、一八二頁上〜中、取意)の説を引用し、源信の私見として早晚は一定ではないと述べている。第八問答では、『無量寿經』巻下(『大正蔵』一二、二七八頁中〜下)に見える弥勒菩薩往生の經説を引いて、淨影の言う「優れた者を基準とする」という説は誤りではないかと問い、弥勒のような大菩薩はここでは問題としないかと答える。

(6) 第九問答 往生が難である理由を論ずる。凡夫も往生できるので、現に千萬もの人が往生を求めて一人二人も往生できないのはなぜかと問い、道綽『安樂集』巻上(『大正蔵』四七、二二頁上〜中)から、信心が不深・不・不連続であるからという「三不信」の説、善導『往生礼讚』(『大正蔵』四七、四三九頁中)から、臨終の時まで専念の者は十即生百即百生、雜修の者はめったに往生できないとする説を引用し、末尾に、「上のごとくといふは、礼・讚等の五念門、至誠等の三心、長時等の四修を指すなり」と註している。善導は『往生礼讚』冒頭に、往生のための安心・起行・作業を説いて、『観無量寿經』の三心(至誠心・

深心・回向発願心)、『浄土論』の五念門(礼拝・讃嘆・作願・観察・回向)、四修(恭敬修・無余修・無間修・長時修)を挙げている。源信はその全体を「念仏」と理解し、その念仏に専念する者は皆往生し、これ以外の雑業を修する者は滅多に往生できないと言っているのである。ちなみに「四修」については、大文第五「助念方法」の第二修行相貌の項に詳説する。そこには出拠として『撰大乘論』『俱舍論』を挙げ、『往生礼讃』『西方要決』の釈を引用している(本講読(七)六七頁)。

(7) 第十問答 第九問答に関連して、臨終の時まで専念せよという善導の説と、「長短・多少みな往生できる」とする懷感の説との会通を求め、一応は共に過なしと答えるが、臨終の時まで怠らないことが基本であると主張している。

(8) 第十一問答 『菩薩処胎経』第二(実は卷三、『大正蔵』一一、一〇二八頁上)に見える懈慢国の説を挙げ、真実報土への往生は困難なのではないかと問う、懷感『群疑論』の説を挙げて会通する。問答ともに『群疑論』卷四(『大正蔵』四七、五〇頁下)からの引用である。懷感は、懈慢国に留まるのは雑修のために執心牢固ならざる者であり、専修の者は執心牢固だから真実報土に往生すると言ふ。第九問答に引いた善導『往生礼讃』の説、あるいは同じく『往生礼讃』(『大正蔵』四七、四三九頁下)の、「ただ意を専らにしてせば、十は即ち十ながら生ず。雑を修して至心ならざれば、千が中に一も無し」等の教説と相違ないと会通するのである。

(9) 第十二問答 ほんのわずかの称名念仏といえども、けっして無駄ではないことを主張する。『華嚴経』(六十卷本)卷二十三(『大正蔵』九、五四四頁上)の偈、およびそれを註釈した法蔵『華嚴経探玄記』卷十(『大正蔵』三五、二九四頁下)に、宿世に善を積んでおけば、今生に苦難の世界に生まれても、宿善の力によって利益を得ることができる、と説かれる。念仏の信も同様である。前世に浄土を願ひ念仏した、その功德が宿善として働くために、極悪人も善知識に出会うことができ、十念念仏によって即座に往生できるのである、と言ふ。文証としては、『十疑論』(『大正蔵』四七、七九頁下)の文を挙げ、懷感も同意であると言ふ。懷感『群疑論』には同様の見解は見えないが、浄影寺慧遠『観経義疏』末(『大正蔵』三七、一八六頁上)に、下品下生人について、「もしこれ先に菩提心を発せし人なれば、また縁に遇ひて五逆四重等の罪を造作すといへども、必ず重悔を生じて、世王等のごとくまた往生を得」とあり、また龍興『観経記』卷上(惠谷隆戒『浄土教の新研究』三七〇頁)には、右の浄影寺慧遠の説を踏まえた上で、「問ふ。もし先に発心するものまさに彼に生ずべしといは

ば、何のゆゑに下輩の三人、並びて同じく彼の国に生じをはりて道心を発すや。答ふ。暫く退失するも、前勢によるがゆゑに、浄土に生ずるを得、さらに発心するのみ」と述べている。

(10) 第十三問答 下々品人は、たとえ宿善があろうとも、十念念仏がなければ往生できない。よって下々品人には十念往生の本願は必須であり、臨終十念こそが往生の条件である、と言ふ。

【現代語訳】

第二に、往生人の行位について。

問う。『瑜伽師地論』に、「第三地の菩薩にして、はじめて浄土に生まれることができるのである」と説かれるのに、いま地前の凡夫や声聞に往生を勧めるところに何の意味があるのか。

答え。浄土には勝劣の区分がある。だから意味のないことではない。懷感『群疑論』に言う通りである。「多くの経論が浄土への往生を説くが、それぞれに根拠がある。浄土には極めて勝れた所と、そうでもない所とがあり、往生にも優劣の等級がある」と。また道宣は、「第三地の菩薩にして、はじめて報身仏の浄土を見るのである」と言ふ。

問う。報身仏の浄土など望むべくもないが、浄土と呼ばれるような所に、重い煩惱を持つ者が生まれることができるのか。

答え。天台の『維摩疏』に、「阿弥陀仏の国は、極めて勝れた福德を得ることのできる所であるが、臨終の時に罪を告白して許しを請ひ、念仏するならば、悪業の障りを取り除かれて、すみやかに往生することができる。煩惱を抱えながらも、心を込めて願えば、浄土に生まれることができるのである」と言ふ。

問う。凡夫の往生を認めるなら、『弥勒問経』の説をどう解釈するのか。経には、「仏を念ずるというのは、愚か者の念仏を言うのではない。煩惱をまじえずに念仏することによって、阿弥陀仏の国に生まれることができるのである」と説かれてはいないか。

答え。『西方要決』に次のように言ふ。「娑婆は苦しみの世界であると知り、訣別しようとする者は、すでに浅はかな凡夫とは言えない。将来には仏となり、あらゆる世界の人々を思い、すべてを救おうとする者である。そのような素晴らしい考えを持つ者は愚か者ではない。彼が念仏する時、煩惱は押しとどめられるのである。だから(煩惱の念をまじえない)と説かれるのである」と。凡夫の行者に、このような徳が備わっているという意味である。

問う。極楽に往生した者はみな不退転の菩薩だと言われる。よって極楽が凡夫の往生する処ではないことは明白だろう。

答え。不退と言っても必ずしも聖者の境界ではない。『西方要決』に次のように言う。「不退に四種ある。『十住毘婆沙論』に言う。〈第一に位不退。何功劫もの間修行を重ねてきたことよって、悪事に手を染めて輪廻をくり返すことがなくなつた状態を言う。第二に行不退。初地に至つた菩薩は、利他行を停止することがない。第三に念不退。第八地以上の菩薩は、無功用地に到達して、思いのままに菩薩行を遂行することができる。第四に処不退。経論には明記されていないが、道理としてあるはずである。なぜなら、天上界に生まれることよって不退の利益を得ることができるよう、浄土でも同じ利益が得られてしかるべきだと思ふからである。長命で病がなく、勝れた菩薩方と交際し、正しいことだけがあつて邪なことがなく、ひたすら清らかで汚れたものがない、常に仏につかえている。この五つの縁によつて、浄土には退転がないのである。〉」以上は省略して引用した。

問う。九品往生人の行位について、諸先学の見解がまちまちである。浄影寺慧遠は、「上品上生人は四・五・六地、上品中生人は初・二・三地、上品下生人は地前の十住・十行・十回向の位である」と言い、力法師は、「上品上生人は十行・十回向、上品中生人は十解すなわち十住、上品下生人は十信である」と言い、基法師は、「上品上生人は十回向、上品中生人は十解・十行、上品下生人は十信である」と言い、ある人は、「上品上生人は初住、上品中生人は第二・三・四・五・六・七・八・九地である」と言い、またある人は、「上品上生人は十信とそれ以前の、下生人は初信である」と言い、またある人は、「上品上生人は十信とそれ以前の、三心(至誠心・深心・回向発願心)を發して三行(世・戒・行の三福行)を修する者、上品中生人・下生人は十信以前の菩提心を發して善を行う凡夫を収め、修行の浅深によつて中・下に分かれる」と言う。諸師の見解がまちまちなのは、「無生法忍」の行位について意見が異なるからである。『仁王般若経』には無生法忍は七・八・九地であると言ひ、諸論には初地あるいは四善根の「忍位」、「菩薩本業瓔珞経」には十住、「華嚴経」には十信、『占察善惡業報経』には一行三昧すなわちひたすら念仏することよつて無生法忍に近い境地に達する者がいることを説く。諸師はこれらの中から一つを選んで、それぞれの見解を提示するのである。中品の三人については、浄影寺慧遠は、「中品上生人は小乗の余流・一來・不還の三果、中品中生人は七方便すなわち三賢・四善根の位、中品下生人は解脱分の善根すなわち三賢位に入るための善を修めた者である」と言う。力法師はこれと同じである。基法師は、「中品上生人は四善根位、中品中生人は三賢位、中

品下生人はそれ以前の者である」と言い、ある人は、「四善根位の忍位・頂位・煖位を順に上・中・下に当てる」と言い、またある人は、「中品の三人は解脱分の善根を修めた者である」と言う以上、上品・中品の六人にはこれ以外の説もある。懐徳の『群疑論』、龍興の『観経記』等に見える。下品の三人には特に行位はない。煩惱を備え悪を行う者である。ということで、往生人の行位には分限のあることが明白となつた。一体どれが我らに分相応だと言えるだろうか。

答え。上品人の行位は高いけれども、下品の三人は我らの分ではないか。まして前掲の説の中には、十信以前の凡夫を上品の三人に配当するものもあつたではないか。また善導の『観経疏』玄義分には、大乘・小乗の七方便位以前の凡夫を九品人に配当して、諸師の説く行位が高すぎることを批判している。経論の教説は、その文章そのものによつて意味を判読すべきである。『観無量寿経』に説く九品の行業を、「行位の高い菩薩の所行とする説に拘泥する必要はなからう。

問う。だとしたら、極楽に生まれてすぐに無生法忍を悟ることはできないだろう。

答え。天台には無生法忍の行位について二説ある。別教の人は、何劫もの修行を重ねて無生法忍を悟るが、円教の人は、あるいは地獄・餓鬼・畜生の身でたちまち無生法忍を得る者もある。穢土でもそうなのだから、浄土はなおさらである。極楽の様々な事を、他国になぞらえて考えてはならない。すべての凡夫が、一定の行位に到達してもいけないのに、悪道に墮ちることがないような処がどこにある。すべての凡夫が、みな神通力を得て自在に菩薩行を行えるような処がどこにある。無生法忍の証果を得るまでの時間についても同様である。

問う。上品人が無生法忍の証果を得るまでの時間は、経説の通りみな同じなのか。

答え。経にはとりあえず一例を挙げているのである。だから浄影寺慧遠の『観経義疏』に、「九品人が極楽に生まれてから証果を得るまでの劫数は、優れた者を基準として説かれている。当然それ以上の時間がかかる場合もある」と取意。私見では、九品の全体を見ると、教説よりも速く証果を得る者もあると思う。

問う。『無量寿経』の中には、弥勒のような大菩薩がやがて極楽に往生すると説かれている。ということは『観無量寿経』に説く証果を得るまでの時間は、劣つた者を基準としていることが分かるだろう。どうして優れた者を基準とすると言ふのか。

答え。極楽に往生して初めて無生法忍の証果を得る者について、その時間の速い遅いを論じて、「優れた者を基準とする」と言うのである。弥勒菩薩のことを

問題にしてはいない。しかし弥勒菩薩のことは、九品往生人の中に含まれるのか否かという問題があるので、別に考えなければならぬ。

問う。愚かな凡夫も往生できるのなら、なぜ当今、娑婆世界には往生極楽を求めるものが何千万人もいるのに、往生できる者は一人二人もいないと言うのか。

答え。道綽和尚は次のように言う。「仏の教えを受け容れる心が深くなく、時にはあるが時にはなくなるというような有様だからだ。また仏の教えを受け容れる心が一定でなく、ぐらぐら揺れていて定まらないからだ。そして仏の教えを受け容れる心が継続せず、時々疑いの心が生ずるからだ。この三つを整えられない者は往生はできない。この三つの心を整えているのに往生できないならば、道理に合わない」と。善導和尚は、「以上のように念仏を続けて臨終の時まで怠らない者は、十人は十人ともに、百人は百人ともに往生する。もし専一に念仏することをやめてその他の修行をしようとする者は、百人中まれに一人か二人、千人中まれに三人から五人ほどしか往生はできない」と言う「以上のように」とは、礼拝・讚嘆等の五念門、至誠心等の三心、長時等の四修を指す。

問う。善導は「臨終の時まで怠ってはならない」と説くのに、なぜ懐疑は、「修行の時間が長い者も短い者も、修行の量が多い者も少ない者も、みな往生することができる」と言うのか。

答え。修行の方法はまちまちであるから、二師ともに誤りではない。しかし臨終の時まで勤め励んで怠らないということは、その行いを間違いないものにするのであり、その姿勢が基本である。

問う。『菩薩廻胎経』の第二に、「この娑婆世界から西方十二億那由他の所に憍慢界がある。その国は快樂に満ちあふれ、きらびやかな歌や舞いが披露され、美しい着物や宝飾、香や花で飾られている。七宝の敷きつめられた床が次々に出てくる。東方に目をやると宝玉の床が東方に広がる。北・西・南を向いても、また同じように宝玉の床が目の前に広がる。共に発心して阿弥陀仏国への往生を願う者たちが、みな憍慢国に心を奪われ、阿弥陀仏国に向かうことができなくなってしまう。阿弥陀仏国に生まれることができるのは、ただかか億千万人に一人である」と説く。この経説から考えて、往生は困難であろう。

答え。『群疑論』に、「前掲善導の文を引いてこの問いを発し、私見を次のように述べている。『菩薩廻胎経』には続いて、〈なぜかと言うと、慢心して怠けるために心がすっかりと定まらないからである〉と言う。念仏以外の様々な修行に手を出す難修の者は、心が定まらないのである。だから憍慢国に生まれるのだ。もし難修をやめて、ひたすら念仏に専念すれば、心が定まり、かならず極楽に往

生できるだろう。中略。また真実の報土に生まれる者は極めて少ない。化土に生まれる者は少なくない。だから特に憍慢国のことを説いて戒めているのである。善導の教説と矛盾するものではない」と。

問う。至誠心・深心・回向発願心の三心が揃っていなくても、臨終の時までたゆまず念仏し続けるということがなくても、阿弥陀仏の名をひとたび聞くだけでも成仏できると言う。それならば、わずかな間でも称名念仏することは、無駄なことではなからう。

答え。一見無駄なことのように見えるが、結局はそうではない。『華嚴経』の偈に、経を聞く者が命終わるときに受ける利益について、次のように歌われている。

「経を聞く力を備える者はみな

世界の終わりの火につつまれても

と大海原とは龍の住む世界のことである。

大海原に浮かぶとも
かならずこの経聞けるだろう」

法蔵は『華嚴経探玄記』にこの文を釈して、「ほかの修行をしたために苦難の世界に生まれただけでも、前世に信を得ていたために、苦難の中でも経を聞く素養を身につけていたのである」と述べている。『華嚴経』の教えを信ずる者にしてこの通りである。念仏を信ずる者にも必ずこのような利益があるだろう。一生のあいだ悪を作り続けてきた者が、臨終の時に善き師に出会い、わずかに十遍の念仏をして、即座に往生することができるのである。その多くは、前世に浄土を願ったことである。だから『十疑論』に、次のように言う。「臨終の時に善き師に出会い、十念を成就する者は、みな前世の善が強大であったために、善き師に出会うことができ、十念を成就することができるのである」と。懐疑も同様のことを言っている。

問う。下品下生人は宿世の善によって往生する、と言うならば、十念往生の本願は、看板だけの中身の無いものだと見えよう。

答え。たとえ宿世の善があろうとも、十念念仏がなければ、下品下生人はかならず無間地獄に墮ちて永遠に苦しみを受けつづけるだろう。よって臨終の十念念仏が往生の必須条件であることは明白である。

第三に往生の多少といふは、『双卷経』にのたまはく、「仏、弥勒に告げたまはく、へこの世界より、六十七億の不退の菩薩ありて、かの国に往生す。一々の菩薩は、すでにかつて無数の諸仏を供養して、次いで弥勒のごとし。もろもろの小行の菩薩および少功徳を修せるものも、称計すべからず。みなまさに往生すべし。他方の仏土もまたかくのごとし。その遠照仏国の百八十億の菩薩、宝蔵仏国の九十億の菩薩、無量意仏国の二百二十億の菩薩、甘露味仏国の二百五十億の菩薩、竜勝仏国の十四億の菩薩、勝力仏国の万四千の菩薩、師子仏国の五百の菩薩、離垢光仏国の八十億の菩薩、徳首仏国の六十億の菩薩、妙徳山仏国の六十億の菩薩、人王仏国の十億の菩薩、無上華仏国の無数不可称計の不退のもろもろの菩薩、智慧勇猛にして、すでにかつて無量の諸仏を供養してまつり、七日のうちに、すなはちよく百千億劫の大士の所修の堅固の法を撰取す。無畏仏国の七百九十億の大菩薩衆、もろもろの小菩薩および比丘等は、称計すべからず。みなまさに往生すべし。ただこの十四億の国のなかのもろもろの菩薩等の、まさに往生すべきのみにあらず。十方世界の無量の仏国より、その往生するものもまたかくのごとく、はなはだ多くして無数なり。われ、ただ十方の諸仏の名号および菩薩・比丘のかの国に生るるものを説かば、昼夜にして一劫すともなほいまだ竟ることあたはじ」と以上。この諸仏の土のなかに、いまの娑婆世界に少善を修して、まさに往生すべきものあり。われら、いま幸ひに釈尊の遺法に遇ひて、億劫の時に一たびたまたま少善往生の流に預かれり。務めて勤修すべし。時を失ふことなかれ。問ふ。もし少善根また往生することを得ば、いかんぞ、『経』に「少善根福徳の因縁をもつて、かの国に生るることを得べからず」とはのたまへる。答ふ。これに異解あり、繁く出すことあたはず。いまわたくしに案じていはく、大小は定まれることなし。相待して名を得。大菩薩に望むれば、これを少善と名づく。輪廻の業に望むれば、これを名づけて大となす。このゆゑに、二経の義、違害せず。

(1) 第一問答 無数の菩薩が次々と極楽に往生すると説く、『無量寿経』巻下(『大正蔵』一一、二七八頁中下)の説を挙げ、我ら娑婆の衆生は幸いにも釈尊の教えに遇ひ、少善往生の縁を得た、と言ひながら、『阿弥陀経』(『大正蔵』一二、三四七頁中)の、少善根では往生できない、という教説を引いて、両説に矛盾はないか、と問う。答えて、大小は相対的な言葉だから矛盾はない、と言う。

【現代語訳】

第三に、極楽に往生する人の数について。

『無量寿経』に言う。「釈尊が弥勒菩薩におっしゃった。へこの娑婆世界からは、六十七億の不退転の菩薩が、極楽に往生する。その一人ひとり、すでに無数の諸仏に敬意をささげてきた、あなたに続く菩薩たちである。そのほかに、ほんのわずかな修行をした菩薩や、ほんの少しの福徳を修めた者が数えきれないほどいて、みな往生する。その他の国々も同様である。遠照仏国の百八十億の菩薩、宝蔵仏国の九十億の菩薩、無量意仏国の二百二十億の菩薩、甘露味仏国の二百五十億の菩薩、竜勝仏国の十四億の菩薩、勝力仏国の万四千の菩薩、師子仏国の五百の菩薩、離垢光仏国の八十億の菩薩、徳首仏国の六十億の菩薩、妙徳山仏国の六十億の菩薩、人王仏国の十億の菩薩、無上華仏国の数えきれないほどの不退転の菩薩たちは、すぐれた智慧と強い意志とをもって、すでに無数の諸仏に敬意をささげてきた人々であり、わずか七日のうちに、百千億劫の時間をかけて菩薩たちが身につけた尊い教えを理解することができるとの能力を持つ。無畏仏国には七百九十億の大菩薩衆のほかに、わずかな修行しかできていない菩薩や修行僧たちが数えきれないほどいて、かれらもみな極楽に往生する。これら十四の国々の菩薩たちだけではない。十方世界の無数の国々から往生する菩薩たちも、やはり数えきれないほどである。その国々の仏の名や、そこから極楽に往生する菩薩や比丘たちの名を言おうとすると、昼夜通して一劫のあいだ言い続けても終わらないだろう」と。これら諸仏の国々の一つとして、わが娑婆世界があり、わずかながりの善を修めて極楽に往生しようとする者がいるのである。われらは幸いにも今、釈尊の教えに出会い、千載一遇の機会を得て、わずかな善行で往生することのできる人々の仲間に入ることができた。急ぎ勤めよ。この時をのがしてはならない。

問う。わずかな善行でも往生することができると言ひながら、『阿弥陀経』に、「わずかながりの善行によつては、極楽に往生することはできない」と説かれるのはなぜか。

答へ。この問題には様々な見解があつて、ここに列挙するいとまはない。私の思うところを述べよう。大・小には決まった基準があるわけではない。相対的な言葉である。大菩薩の行いに比べればわずかな善でも、迷いの世界の行いに比べれば大きな善と言えるだろう。よつて、『無量寿経』『阿弥陀経』の教説に矛盾はない。

第四に尋常の念相を明かさば、これに多種あり。大きに分ちて四となす^①。一には定業、いはく、坐禪入定して仏を觀するなり。二には散業、いはく、行住坐臥に、散心に仏を念するなり。三には有相の業、いはく、あるいは相好を觀じ、あるいは名号を念じて、ひとへに穢土を厭ひて、もつばらにして淨土を求むるなり。四には無相の業、いはく、仏を称念し淨土を欣求すといへども、しかも身土すなはち畢竟空にして、幻のごとく夢のごとし、体に即して空なり、空なりといへども有なり、非有非空なりと觀じて、この無二を通過して、真に第一義に入るなり。これを無相の業と名づく。これ最上の三昧なり。ゆゑに『双卷經』に、阿彌陀仏のためはく、

「諸法の性は、一切空・無我なりと通達すれども、もつばら淨土を求めて、かならずかくのごとき利を成せん」と。

また『止觀』の常行三昧のなかに、三段の文あり。つぶさには上の別行のなかに引くがごとし。

問ふ^②。定散の念仏は、ともに往生するや。答ふ。嚴重の心をもつて念すれば、往生せずといふことなし。ゆゑに感師、念仏の差別を説きていはく、「あるいは深、あるいは浅、定に通じ散に通ず。定といふはすなはち凡夫より十地に終る。善財童子の、功德雲比丘の所にして念仏三昧を請け学ひしとき、これすなはち甚深の法なり。散といふはすなはち一切衆生の、もしては行、もしては坐、一切の時にみな念仏を念ずることを得て、諸務も妨げず、乃至、命終にまたその行を成ずるなり」と以上。

問ふ。有相・無相の業は、ともに往生することを得るや。答ふ。禪和尙のいはく、「もし始学のものは、いまだ相を破することあたはず、ただよく相によりて專至せば、往生せずといふことなし。疑ふべからず」と。また感和尙のいはく、「往生すでに品類差殊なれば、修因また浅深ありて各別なり。ただいふべからず、ただ無所得を修して往生することを得、有所得の心は生ずることを得ず」と。

問ふ^③。もししからば、いかにぞ『仏藏經』に説かく、「もし比丘ありて、余の比丘に教へて、へなんちまさに仏を念じ、法を念じ、僧を念じ、戒を念じ、施を念じ、天を念ずべし。かくのごとき等の思惟をもつて、涅槃の安樂寂滅なること

を觀じ、ただ涅槃の畢竟清淨なることを愛せよ」と。かくのごとく教ふるものを名づけて邪教となし、悪知識と名づく。この人を名づけて、われを誹謗して外道を助くとす。かくのごとき悪人は、われすなはち一飲の水をも受くることを聽さず」と。またのたまはく、「むしろ五逆重悪を成就すとも、我見・衆生見・寿見・命見・陰入界見等をば成就せざれ」と以上略抄。答ふ。感師釈していはく、

「ある聖教にまたのたまはく、へむしる我見を起すこと須弥山のごとくにすとも、空見を起すこと芥子ばかりのごとくもせざれ」と。かくのごとき等の諸大乘經に、有を訶し空を誦し、大を讚じ小を讚ずること、ならびにすなはち機に違つて不同なり。またある『經』にのたまはく、へいま阿彌陀如来・応・正等覺は、つぶさにかくのごとき三十二相・八十隨形好まします。身色・光明は聚金の融けたるがごとし。かくのごとくおもひて、乃至、かの如来を念せず。またかの如来を得ざれ、すでにかくのごとくして次第に空三昧を得」と。また『觀仏三昧經』にのたまはく、へ如来にまた法身・十力・無畏・三昧・解脱、もるもろの神通の事まします。かくのごとき妙処は、なんち凡夫の覺るところの境界にあらず。ただまさに深心にして隨喜の想を起すべし。この想を起しをはりて、まさにまた念を繋けて仏の功德を念ずべし」と。ゆゑに知りぬ、初学の輩はかの色身を觀じ、後学の徒は法身を念ずるなり。ゆゑに、へかくのごとくして次第に空三昧を得」といへり。まさにすべからくよく經の意を會すべし、毀讚の心をなすことなかれ。妙に知る、大聖は巧みに根機に返じたまへることを」と以上、『觀仏經』の第九に、仏の一毛を觀じ、乃至、具足の色身を觀ずることを説きはりて、引くとるの十力・無畏・三昧等の文あり。

問ふ^④。念仏の行は、九品のなかにおいては、これいづれの品の撰ぞ。答ふ。もし説のごとく行ずるは、理、上上に当れり。かくのごとくして、その勝劣に隨ひて九品を分つべし。しかも『經』の所説の九品の行業は、これ一端を示すなり。理、実には無量なり。

問ふ^⑤。もし定散ともに往生することを得るがごとく、また現身とともに仏を見たてまつるとせんや。答ふ。經論に多く、「三昧成就して、すなはち仏を見たてまつることを得」と説けり。あきらかに知りぬ、散業は見たてまつることを得べからずといふことを。ただ別縁をば除く。

問ふ^⑥。有相・無相の觀、ともに仏を見たてまつることを得るや。答ふ。無相の、仏を見たてまつることは、理疑はざるにあり。その有相の觀も、あるいはまた仏を見たてまつる。ゆゑに『觀經』等に色相を觀ずることを勧めたり。

問ふ^⑦。もし有相觀また仏を見たてまつらば、いかにぞ『華嚴經』の偈に、「凡夫の諸法を見ること、ただ相に隨ひて転ず。

法の無相を了せず、これをもつて仏を見たてまつらざるなり。見ることをばすなはち垢となす。これはすなはちいまだ見るとなさず。諸見を遠離し、かくのごとくしてすなはち仏を見たてまつる」とのたまひ、また、

「一切の法は自性無所有なりと了知する、

かくのごとく法性を解すれば、すなはち處舎那を見たてまつる」

とのたまひ、また『金剛經』に、

「もし色をもつてわれを見、音声をもつてわれを求むるは、

この人は邪道を行じて、如来を見たてまつることあたはず」

とのたまへるや。答ふ。『要決』に通じていはく、「大師の、教を説きたまふことは、義に多門あり。おのおの時機に称ひ、等しくして差異なし。『般若經』はおのづからこれ一門なり。『弥陀』等の經もまた一理なりとなす。なんとならば、一切の諸仏にならびに三身まします。法仏には形体なく、色・声なし。まことに二乗および小菩薩の、三身不異なりと説きたまふを聞きて、すなはち同じく色・声ありと謂ひて、ただ化身の色相を見て、つひに法身もまたしかなりと執するがためのゆゑに、説きて邪となす。『弥陀經』等に、仏の名を念じ、相を觀じ、淨土に生るることを求めよと勧めたることは、ただ凡夫の障重くして、法身の幽微にして、法縁すること難きをもつて、しばらく仏を念じ、形を觀じ、禮讚せよと教へたまふなり」と略抄。

問ふ。凡夫の行者は、勤めて修習すといへども、心純淨ならず。なんぞたやすく仏を見ん。答ふ。衆縁合して見るなり。ただ自力のみにはあらず。『般舟經』に三の縁あり。上の九十日の行に引くところの『止觀』の文のごとし。

問ふ。いくばくの因縁をもつてか、かの国に生るることを得る。答ふ。經によりてこれを案するに、四の因縁を具す。一は自善根の因力、二は自願求の因力、三は阿弥陀の本願の縁、四は衆聖助念の縁なり。釈迦の護助は『平等覺經』に出でたり。六方の仏の護念は『小經』に出でたり。山海慧菩薩等の護持は『十往生經』に出でたり。

(1) 分ちて四となす 平生の念仏を、①定業(坐禪入定して仏を觀する)、②散業(散乱心のままで念仏する)、③有相業(仏の相好を觀じ名号を念ずる)、④無相業(非有非空の真如第一義諦を觀する)の四種に分け、第四の無相業を最上とする。その無相業は、『無量壽經』卷下(『大正藏』二二、二七三頁上)や、『摩訶止觀』卷二上(『大正藏』四六、一二頁上)に説く念仏であると言う。『無量壽經』には、一切空無我に通達したのち慈悲によって淨土を建立するとい

う阿弥陀仏の願いが説かれ、『摩訶止觀』常行三昧の文には、色身の阿弥陀仏を念じながらも、色身にも法身にも貪着しないことが求められている。源信は、中道第一義觀を最上の念仏と考えているようである。

(2) 第一・第二問答 まず①定業・②散業の念仏を比べ、次に③有相・④無相の念仏を比べて、すべてが往生の因となることを主張する。第一問答では、懷感『群疑論』卷五(『大正藏』四七、五九頁下)の說を挙げ、第二問答では道綽『安樂集』卷上(『大正藏』四七、一一頁中)・懷感『群疑論』卷一(『大正藏』四七、三六頁下)の說を挙げている。

(3) 第三問答 全体が懷感『群疑論』卷五(『大正藏』四七、五七頁上)からの引用(略抄)。「仏藏經」卷上(『大正藏』一五、七八四頁中・下)より、有相念を否定する說を引いて第一問答に疑問を呈し、『無上依經』卷上(『大正藏』一六、四七一頁中)、『大集經賢護分』(『大正藏』一三、八七六頁中)、『觀仏三昧海經』卷九(『大正藏』一五、六八七頁下)等の文を挙げて、有相の色身觀・無相の法身觀は機根によって説き分けられると述べている。

(4) 第四問答 念仏行は『觀無量壽經』九品往生の中ではどこに属するかと問ひ、理としては上品上生であるが、九品のすべてにわたると答える。『無量壽經』の三輩往生段では、すべての項に「念無量壽仏」という文言があるが、『觀無量壽經』では、下品段以外の項には明示されていない点を問題にしたのである。

(5) 第五問答 散業の念仏では通常、現身見仏は不可能であることを言う。

(6) 第六問答 有相の念仏でも、場合によっては現身見仏が可能であることを言う。

(7) 第七問答 第六問答を承け、八十卷本『華嚴經』卷十六(『大正藏』一〇、八一頁下・八二頁中・八二頁上)、『金剛般若經』(『大正藏』八、七五二頁上)の偈を引いて、有相の觀念では見仏は不可能なのではないかと問ひ、『西方要決』(『大正藏』四七、一〇四頁中)の見解を挙げて会通している。『西方要決』は、『金剛般若經』の說のみが会通の対象となっている。釈尊の教説は時機相應を旨とし、『般若經』は色相に執着する行者に対してその過誤を指摘するものであり、『阿弥陀經』等は罪障のために真如を捉え難い凡夫に対して色身觀による禮讚を勧めるものと述べている。

(8) 第八・第九問答 凡夫の往生には、行者自身の力だけでなく、様々な因縁がはたらいていることを述べている。第八問答では、大文第六「別時念仏」尋常別行の項に引用した『摩訶止觀』卷二上(『大正藏』四六、一二頁上)一三頁上

の文に見える、『般舟三昧経』卷上(『大正蔵』一三、九〇五頁下)の文を参看せよと言ふ。そこには、「仏の威神力・仏の三昧力・行者の功德力」の三つが合わさつて般舟三昧が成就すると説かれてゐる。第九問答では、四つの因縁が合して往生できると言ひ、因(直接原因)として、行者の発願と善行すなわち「願・行」を挙げ、縁(間接原因)として、阿弥陀仏の本願と諸仏菩薩の護念とを挙げる。護念の典拠として『平等覺経』卷三(『大正蔵』二一、二九三頁上)、『阿弥陀経』(『大正蔵』一一、三四七頁中〜三四八頁上)、『十往生経』(『統蔵』一、八七、二九二丁下〜二九三丁右上)を提示している。

【現代語訳】

第四に、平生念仏の様相について。

多くの種類があるがおおよそ四つに分類できる。第一に定業、すなわち坐禪して精神統一の境地に入つて仏を観念すること。第二に散業、すなわち普通に生活しながら雑念の中で仏を観念すること。第三に有相の業、すなわち心に仏の姿を想ひ描いて、そのすばらしい容姿を観念し、あるいは名号を念じ、ひたすら娑婆世界を離れよう、浄土に生まれようと思ふこと。第四に無相の業、すなわち仏の名を称え、仏を念じて浄土を願ひながらも、仏身も浄土も結局は実体の無い、夢まぼろしのようなものであると観すること。つまり本質的には実体が無いのであるが、しかしながら存在を現すこともできる、有るのではなく、無いのでもない、と観念することであり、「有・無」の観点を離れて物事をとらえることのできる智慧を獲得して、眞の悟りの境地に入ること、それを無相の業と言ふのである。これこそが最高の念仏三昧である。よつて『無量壽経』に阿弥陀仏が次のようにおっしゃつてゐる。

「あらゆるものは空と知り

執着すべき実体なしと悟れども

ただひたすらに浄土を求め

かならず理想の国を築かん」と。

また『摩訶止観』の常行三昧を説く三段の文も同様である詳しくは本文第六「別時念仏」の尋常別行の項に引用した通りである。

問う。定業・散業の念仏は、ともに往生できるのか。

答え。心を込めて念ずれば、往生することができる。よつて懷感はそのように言う。「念仏の法門には深・浅があり、定業・散業の両方が説かれてゐる。定業の念仏は、凡夫から徐々に修行を重ねて十地の聖者の位を目指すもので、善財童子が功徳雲比丘のもとで学んだ念仏三昧のように、極めて深い法門である。散業の念仏は、あらゆる者が通常の生活の中でいつでもどこでも、仕事をしながらで

もできるもので、臨終の際にも行うことのできる念仏である」と。

問う。有相・無相の念仏は、ともに往生できるのか。

答え。道綽が次のように言う。「仏道修行の初心者には、観想の対象としての仏の相好を離れて観念を形成することができない。それでもひたすら相好を念ずれば、往生することができる。疑つてはならない」と。また懷感も次のように述べてゐる。「往生には種々の階位があるのだから、その因にも浅深の違いがある。平等無差別の理を悟つた者は往生できるが、観想の対象に執着しているうちは往生できない、などと言つてはならない」と。

問う。有相・無相ともに往生できると言ふのなら、なぜ『仏蔵経』に次のように説かれるのか。「へ仏・法・僧の三宝を念じ、五戒を守り、修行僧や教団に財物を施し、天上界に生まれようと思ふと言ひ、また、その有相の想念によつて、悟りの世界の安らかな様子を観念し、ひたすら悟りの世界の清らかな情景に愛着せよ」などと説く教を邪教と言ひ、そのような教を説く修行僧を悪知識と呼ぶ。また仏教を誹謗して外道に荷担する者と言ふ。このような悪人は、一滴の水さえ施されてはならない」と。また同じ経に、なぜ次のように言われるのか。「たとえ五逆の罪を重ねようとも、へ自己は不変の実体である、人は不変の実体である、生命は私のものである、生命は永遠である、自分は永遠に存在する」などは、決して思つてはならない」と。

答え。懷感師は、次のように述べてゐる。「ある經典に、へたとえ自己は不変の実体であるという思いを山のように重ねようとも、空にとられるような考えは微塵も起こしてはならない」と言ふ。大乘經典には、実体にとられることを否定したり、空にとられることを否定したり、あるいは大乘を讃え、あるいは小乗を讃えるなど、教を説く相手の能力・性質に応じて様々である。また、ある経には、次のように言ふ。へまずは、阿弥陀如来は三十二相・八十随形好をすべて備えていらつしやる、その身体と光明は、種々の黄金が融け合つてゐるようである、と想念し、次いで如来の姿を想念せず、また如来にとられることのない境地に進み、そしてやがてはすべてを空であるとして観する境地に達するのである」と。また『観仏三昧海経』には、次のように言ふ。へ如来には「戒・定・慧・解脱・解脱知見」の五分法身、十種の智力、説法の際に備へてゐる四種の揺るぎない自信、「空・無相・無願」の三三昧、あるいは三解脱門など、様々な不可思議の能力がある。そのような境地は、あなたが凡夫に理解できるものではない。ただ深く信じて喜びの心を起こせばよい。そしてさらに心を傾けて仏の福徳を念ぜよ」と。よつて初学者は仏の具体的な姿を観念し、上級者は真如そのものを観

事を縁ぜざれば、すなはち業道成弁す。またいまだ勞はしくこれが頭数をしも記せず。またいはく、もし久行の人の念は、多くこれによるべし。もし始行の人の念は、数を記するもまた好し。これまた聖教によれり」と以上。あるがいはく、「一心に〈南無阿弥陀仏〉と称念して、この六字を経るあひだを一念と名づく」と。

問ふ。『弥勒所問經』の十念往生は、かの一々の念、深広なり。いかんぞ、いま十声仏を念じて往生を得といふや。答ふ。諸師の所釈、不同なり。寂法師のいはく、「これは、心をもつばらにして仏の名を称する時に、自然にかくのごとき十を具足すと説くなり。かならずしも一々に、別に慈等を縁するにはあらず。またかの慈等を数へて十となすにはあらず。いかんぞ、別に縁せざるに、しかも十を具足するとならば、戒を受けんと欲して三帰を称する時に、別に離殺等の事を縁せずといへども、しかもよくつぶさに離殺等の戒を得るがごとし。まさに知るべし、このなかの道理もまたしかなり。また十念を具足して〈南無阿弥陀仏〉と称すべしといふは、いはく、よく慈等の十念を具足して〈南無仏〉と称するなり。もしよくかくのごとくすれば、称念するところに随ひて、もしは一称、もしは多称、みな往生することを得」と。感法師のいはく、「おのおのこれ聖教にして、たがひに往生浄土の法門を説けば、みな浄業を成ず。なによりてか、かれをもつて是となし、これを斥けて非といはん。ただしみづから經を解らず、またすなはちもるもの学者を惑はす」と。迦才師のいはく、「この十念は、現在の時になすなり。『觀經』のなかの十念は、命終の時に臨みてなすなり」と以上。意、感に同じ。

問ふ。『双卷經』にのたまはく、「乃至一念するに、往生することを得」と。これ十念と、いかんが乖角せる。答ふ。感師のいはく、「極悪業のものは十を満てて生ずることを得、余のものは、乃至一念してもまた生ず」と。

問ふ。生れてよりこのかた、もるもの悪を作りて一善をも修せざるもの、命終の時に臨みてわづかに十声念するに、なんぞよく罪を滅して、永く三界を出でて、すなはち浄土に生れん。答ふ。『那先比丘問仏經』にのたまふがごとし。「時に彌蘭王ありて、羅漢那先比丘に問ひていはく、へん、世間にありて悪を作ること百歳に至るまです。死の時に臨みて仏を念せば、死して後に天に生るとは、われこの説を信せず」と。またいはく、「一の生命を殺さば、死して泥梨のなかに入るとは、われまた信せず」と。比丘、王に問はく、「へもし人、小さき石を持ちて、水のなかに置在かば、石は浮ぶや没むや」と。王のいはく、「へもし人、小さき石を持ちて、水のなかに置在かば、石は浮ぶや没むや」と。王のいはく、「へもし人、小さき石を持ちて、船の上に置在かば、没

しななやいなや」と。王のいはく、「へ没まじ」と。那先のいはく、「船のなかの百丈の大きな石は、船によりて没することを得ず。人、本の悪ありといへども、一時も仏を念すれば、泥梨に没せずしてすなはち天上に生ること、なんぞ信ぜざらんや。その小さき石の没するといふは、人の悪を作り、經法を知らずして、死して後にすなはち泥梨に入るがごとし。なんぞ信ぜざらんや」と。王のいはく、「善きかな、善きかな」と。比丘のいはく、「へ両の人ともに死して、一人は第七の梵天に生れ、一人は罽賓国に生るるがごとし、この二人は、遠近異なりといへども、死すればすなはち一時に到る。一双の飛鳥ありて、一は高き樹の上にして止り、一は卑き樹の上にと止らんに、両の鳥一時にともに飛ぶに、その影ともに到るがごときのみ。愚人のごときは悪を作りて殃を得ること大にして、智人は悪を作りて殃を得ること小なるがごとし。焼けたる鉄を地に在けるを、一人は焼けたりと知り、一人は知らずして、両の人ともに取るに、しかも知らざるものは手を爛ること大にして、知れるものは少し壊るるがごとし。悪を作ること大

たしかなり。愚者はみづから悔ゆることあたはざるがゆゑに、殃を得ること大なり。智者は悪を作れども不当なりと知るがゆゑに、日々にみづから悔ゆることをなせば、その罪小なり」と以上。十念にもるもの罪を滅して、仏の悲願の船に乗りて、須臾に往生することを得ることも、その理またしかるべし。また『十疑』に釈していはく、「いま三種の道理をもつて校量するに、輕重は不定なり。時節の久近、多少には在らず。いかなるを三となす。一には心に在り、二には縁に在り、三には決定に在るなり。へ心に在り」といふは、罪を造る時はみづからの虚妄顛倒の心より生ずるも、念仏の心は、善知識に従ひて阿弥陀仏の真実の功德名号を説く心より生ず。一は虚、一は実なり。あにひびぶることを得んや。たとへば、万年の暗き室に日の光しばらくも至りぬれば、しかも暗たちまちに除くるがごとし。あに久しきよりこのかたの暗といひて、あへて滅せざる

ことあらんや。へ縁に在り」といふは、罪を造る時には、虚妄痴暗の心の、虚妄の境界を縁する顛倒の心より生ずるも、念仏の心は、仏の清淨真実の功德名号を聞きて、無上菩提を縁する心より生ず。一は真、一は偽なり。あにひびぶることを得んや。たとへば、人ありて毒の箭に中てられて、箭深く、毒疹ましくて、肌を傷り、骨に致るときに、一たび滅除薬の鼓の声を聞けば、すなはち毒の箭除くるがごとし。あに深毒なるをもつてあへて出でざらんや。へ決定に在り」といふは、罪を造る時は有間心・有後心をもつてす。仏を念する時は無間心・無後心をもつてし、つひにすなはち命を捨つるまで善心猛利なり。ここをもつてすなはち生ず。たとへば十圍の索は千夫も制せざれども、童子剣を揮ひて須臾に兩段す

るがごとし。また千年積める草に、大きき豆ばかりの火をもつてこれを焚くに、小時にすなはち尽くるがごとし。また人ありて、一生よりこのかた、十善業を修して天に生るることを得べきに、臨終の時に一念の決定の邪見を起さば、すなはち阿鼻地獄に墮するがごとし。悪業の虚妄なるすら猛烈なるをもつてのゆゑに、なほよく一生の善業を排ひて悪道に墮せしむ。あにいはんや、臨終に猛烈の心に仏を念ずる、真実無間の善業をや。無始の悪業を排ふことあたはずして、浄土に生るることを得ずといはば、この処あることなからん」と以上。また『安樂集』に、七の喩へをもつてこの義を顕せり。「一には少火の喩へ、前のごとし。二には、躰なるものも他の船に寄載すれば、風帆の勢ひによりて一日に千里に至る。三には、貧人、一端の物を獲てもつて王に貢るに、王慶びて重く賞するに、しばらくのあひだに、富貴、望みに盈つ。四には、劣夫も、もし輪王の行に従へば、すなはち虚空に乗じて、飛騰自在なり。五には十圍の索の喩へ、前のごとし。六には、鳩鳥水に入れば魚蚌ごとごとく斃ぬ。みな犀角をもつてこれに触るれば、死したるもの還りて活る。七には、黄鵠、〈子安子安〉と喚べば、還りて活る。あに墳下の千齡決めて甦るべきことなしといふことを得べけんや。一切の万法にみな自力・他力、自撰・他撰ありて、千開万閉無量無辺なり。あに有礙の識をもつて、かの無礙の法を疑ふことを得んや。また五不思議のなかには仏法もつとも不可思議なり。あに三界の繫業をもつて重しとなし、かの少時の念法を疑ひて軽しとなさんや」と以上略抄。いまこれに加へていはく、一には、栴檀の樹出成する時に、よく四十由旬の伊蘭の林を交して、あまねくみな香美ならしむ。二には、獅子の筋を用ゐて、もつて琴の絃となせば、音声一たび奏するに、一切の余の絃、ことごとくみな断壊しぬ。三には、一斤の石汁、よく千斤の銅を交して金となす。四には、金剛堅固なりといへども、殺羊の角をもつてこれを拍けば、すなはち漣然として水のごとく泮けぬ以上、滅罪の譬へ。五には、雪山に草あり、名づけて忍辱となす。牛もし食すれば、すなはち醍醐を得。六には、沙訶陀薬において、ただ見ることあるものは、毒を得ること無量なり。乃至、念ずるものは宿命智を得。七には、孔雀、雷の声を聞きてすなはち身あることを得。八には、尸利沙、昴星を見てすなはち菓実を出生す以上、生善の譬へ。九には、住水宝をもつてその身に瓔珞とすれば、深き水のなかに入れども、しかも没み溺せず。十には、沙磧少ないといへども、なほ浮ぶことあたはず。磐石大なりといへども、船に寄すればよく浮ぶ以上、總の譬へ。諸法の力用、思ひがたきことかくのごとし。念仏の功力、これに准へて疑ふことなかれ。

問ふ⁽⁶⁾。臨終の心念は、その力いくばくなればか、よく大事を成ずる。答ふ。

その力、百年の業に勝れたり。ゆゑに『大論』にいはく、「この心は時のあひだ少なしといへども、しかも心力猛烈なること、火のごとく毒のごとくなれば、少なしといへどもよく大事を成ず。これ死なんとする時の心も、決定して勇健なるがゆゑに、百歳の行力に勝れたり。この後心を名づけて大心となす。身およびもろもろの根を捨つるをもつて、事急なるがゆゑに。人の、陣に入るに身命を惜しまざるを、名づけて健となすがごとし。阿羅漢のこの身の着を捨つるがゆゑに阿羅漢の道を得るがごとし」と以上。これによりて『安樂集』にいはく、「一切衆生臨終の時には、刀風形を解き、死苦来り逼むるに、大怖畏を生じて、乃至、すなはち往生することを得」と。

問ふ⁽⁶⁾。深き観念の力、罪を滅することはしかるべし。いかんぞ、仏号を称念するに無量の罪を滅する。もししからば、指をもつて月を指すに、この指よく闇を破すべし。答ふ。綽和尚釈していはく、「諸法は万差なり。一概すべからず。おのづから名の法に即するあり。おのづから名の法に異することとき、これなりといふは、諸仏・菩薩の名号、禁呪の音辞、修多羅の章句等のこととき、これなり。禁呪の辞に、〈日出東方赤作黄〉といはんに、たとひ西亥に禁を行ずるも、患へるものまた愈ゆるがごとし。また人ありて、狗に噛はるることを被るに、虎の骨を炙りてこれを熨せば、患へるものすなはち愈ゆるがごとし。もし時に骨なくは、よく掌を擲けてこれを磨りて、口のなかに喚びて、〈虎来虎来〉といへば、患へるものまた愈えぬ。あるいはまた人ありて、脚筋を患はんに、木瓜の杖を炙りてこれを熨せば、患へるものすなはち愈えぬ。もし木瓜なければ、手を炙りてこれを磨り、口に〈木瓜〉と喚べば、患へるものまた愈えぬ。名の法に異するといふは、指をもつて月を指すがごとき、これなり」と以上。『要決』にいはく、「諸仏は、願行をもつてこの果名を成ずれば、ただよく号を念ずるに、つぶさに衆徳を苞ねたり。ゆゑに大善を成ず」と以上、かの文に『淨名』『成実』の文を引けり。つぶさには上の助念方法のごとし。

問ふ⁽⁷⁾。もし下下品の五逆罪を造れるもの、十たび仏を念ずるによりて往生することを得といはば、いかんぞ、『仏藏經』の第三にのたまはく、「大狂蔽仏の滅後に四の惡比丘ありき。第一義・無所有・畢竟空の法を捨てて、外道尼健子の論を貪樂しき。この人、命終して阿鼻地獄に墮ちて、仰ぎて臥し、伏きて臥し、左脇にして臥し、右脇にして臥すこと、おのおの九百万億歳、熱鉄の上にして焼き燃かれ、雉がれ爛れき。死しをはりて、さらに灰地獄・大灰地獄・等活地獄・黒繩地獄に生れて、みな上のごとき歳数、苦を受く。黒繩より死しては還りて阿鼻地獄に生る。かの、家と出家にして親近せしもの、ならびにもろもろの檀越、おほ

よそ六百四万億の人、この四の師とともに生じともに死して、大地獄にありても
 るもろの焼煮を受けき。劫尽きては他方の地獄に転生し、劫成しては還りてこの
 間の地獄に生る。久々にして地獄を免れて人中に生れては、五百世、生れてより
 盲なり。後に一切明王仏に値ひて出家して、十万億歳、勤修精進すること頭燃を
 救ふがごとくせしかども、順忍すら得ざりき。いはんや、道果を得んや。命終し
 ては還りて阿鼻地獄に生れにき。後に九十九億の仏に値ひても、順忍すら得ざり
 き。なにをもつてのゆゑに。仏の、深法を説きたまひしに、この人信ぜずして、
 破壊し違逆し、賢聖・持戒の比丘を破毀して、その過惡を出せる破法の因縁もつ
 て、法としてまさにしかるべし」と以上、略して抄す。「四の比丘」とは苦岸比丘・薩和多比丘・
 将去比丘・跋難陀比丘なり。十万億歳、頭燃を救ふがごとくせしも、なほ罪を滅せずし
 て、還りて地獄に生じき。いかんぞ、仏を念ずること一声・十声してすなはち罪
 を滅して、浄土に往生することを得るや。答ふ。感師釈していはく、「仏を念ず
 るは、五の縁によるがゆゑに罪を滅す。一には、大乘の心を発す縁。二には、浄
 土に生ぜん願する縁。小乗の人は、十方の仏ましますと信ぜざるがゆゑに。三
 には、阿弥陀仏の本願の縁。四には、念仏の功德の縁。かの比丘は、ただ四念処
 の觀をなせしがゆゑに。五には、仏の威力をもつて加持したまふ縁なり。このゆ
 ゑに、罪を滅して浄土に生ずることを得。かの小乗の人は、しからざりき。ゆゑ
 に罪を滅することあたはず」と略抄。

問ふ⁽⁹⁾。もししからば、いかんぞ、『双卷経』に十念往生を説きて、「ただ五逆
 と誹謗正法をば除く」とのたまへる。答ふ。智愍等の諸師のいはく、「もしただ
 五逆を造れるものは、十念によるがゆゑに生ずることを得。もし逆罪をも造り、
 また法をも謗れるものは、往生することを得ず」と。あるがいはく、「五逆の不
 定業を造れるものは往生することを得るも、五逆の定業を造れるものは往生せず
 」と。かくのごとく十五家の釈あり。感法師、諸師の釈を用ゐずして、みづからい
 はく、「もし逆を造らざる人は、念の多少を論ずるにあらず、一声・十声ともに
 浄土に生る。もし逆を造れる人は、かならずすべからく十を満つべし。一をも闕
 けつれば生ぜず。ゆゑに〈除く〉といふなり」と以上。いま試みに釈を加へば、
 余処にはあまねく往生の種類を顯すも、本願にはただ定生の人のみを挙げ。ゆゑ
 にいへり、「しからずは、正覺を取らじ」と。余人の十念はさだめて往生するこ
 とを得、逆者の一念はさだめて生ずることあたはず。逆の十と余の一とは、みな
 これ不定なり。ゆゑに、願にはただ余人の十念を挙げて、余処には、兼ねて逆の
 十と余の一とを取れり。この義はまだ決せず。別に思忖すべし。

別なるがゆゑに。また臨終と尋常と、念ずる特別なるがゆゑに。
 問ふ⁽¹⁰⁾。五逆はこれ順生の業なり。報・時ともに定まれり。いかんぞ滅するこ
 とを得ん。答ふ。感師、これを釈していはく、「九部の不了の教のなかに、も
 るもろの不信業果の凡夫のために、密意をもつて説きて〈定報の業あり〉といふ。
 もろもろの大乗の了義の教のなかに、〈一切の業ごとくみな不定なり〉と
 説きたまふ。『涅槃経』の第十八巻にのたまふがごとし。耆婆、阿闍世王のため
 に懺悔の法を説くに、〈罪滅することを得たり〉と。またのたまはく、〈臣、仏
 の説を聞くに、《一の善心を修すれば百種の惡を破す》と。少しき毒藥のよく衆
 生を害するがごとし。少善もまたしかり。よく大惡を破す》と。また三十一の
 たまはく、〈善男子、もろもろの衆生ありて、業縁のなかにおいて心軽んじて信
 ぜず。かれを度せんがためのゆゑにかくのごとき説をなしたまふ。善男子、一切
 の作業は軽あり重あり。軽重の二業にまたおのおの二あり。一には決定、二には
 不決定なり〉と。またのたまはく、〈あるいは重業の、軽となし得べきことあり。
 あるいは軽業の、重となし得べきことあり。有智の人は、智慧の力をもつて、よ
 く地獄の極重の業をして現世に軽く受せしむるも、愚痴の人は、現世の軽業を地
 獄に重く受く〉と。阿闍世王は罪を懺悔しをはりて地獄に入らず。鶻掘摩羅は阿
 羅漢を得たり。『瑜伽論』に説かく、〈いまだ解脱を得ざるを、決定業と説き、
 すでに解脱を得たるを、不定業と名づく〉と。かくのごとき等のもろもろの大乗
 經論には、五逆罪等を説きてみな不定と名づけて、ことごとく消滅することを得
 」と転重輕受の相は、つぶさに『放鉢経』に出でたり。
 問ふ⁽¹¹⁾。引くところの文にのたまはく、「智者は重きを転じて軽くして受す」と。
 下品生の人は、ただ十念しをはりてすなはち浄土に生るるは、いづれの処にして
 か輕受する。答ふ。『双卷経』に、かの土の胎生のものを説きてのたまはく、「五
 百歳のうちに三宝を見たてまつらず、供養したてまつりて、もろもろの善本を修
 することを得ず。しかもこれをもつて苦となす。余の樂ありといへども、なほか
 の処をば樂はず」と以上。これに准ずるに、七七日・六劫・十二劫、仏を見ず、
 法を聞かざる等をもつて、輕受の苦となすべきのみ。
 問ふ⁽¹²⁾。もし臨終に一たび仏の名を念ずるに、よく八十億劫のもろもろの罪を
 滅するがごとし、尋常の行者もまたしかるべきや。答ふ。臨終の心、力は強くし
 てよく無量の罪を滅す。尋常に名を称するは、かれがごとくなるべからず。しか
 も、もし観念成すれば、また無量の罪を滅す。もしただ名を称するのみならば、
 心の浅深に隨ひてその利益を得ること、差別あるべし。つぶさには前の利益門の
 ごとし。

問ふ^⑧。なにをもつてか、浅心の念仏もまた利益ありとは知ることを得る。答ふ。『首楞嚴三昧經』にのたまはく、「大業王あり、名を滅除といふ。もし闘戰の時に、もつて鼓に塗りつれば、もろもろの、箭に射られ刀・矛に傷られたるもの、鼓の声を聞くことを得つれば、箭出でて毒除ころがごとし。かくのごとく、菩薩の首楞嚴三昧に住する時には、名を聞くことあるものは、貪・患・痴の箭自然に抜け出でて、もろもろの邪見の毒みなことごとく除滅し、一切の煩惱また発動せず」と以上、諸法の真如実相を觀じ、凡夫の法と仏法と不二なりと見る、これを首楞嚴三昧を修習すと名づく。菩薩すでにしかり、いかにいはんや仏をや。名を聞く、すでにしかり、いかにいはんや念ずるをや。これによりて知りぬべし、たとひ浅心の念も利益虚しからず。

(1) 第一問答 『觀無量壽經』下々品所説の「十念」の意味を問ひ、道綽『安樂集』卷上(『大正藏』四七、一頁上)と、「有云」として新羅義寂『無量壽經述義記』卷中(古逸、『安養集』八二頁)の説を挙げている。道綽の説は、曇鸞『往生論註』卷上(『大正藏』四〇、八三四頁下)を踏襲するもので、「専念」の意を強調している。義寂の説は称名の意を含み、十念を十遍の称名と解するものである。この見解は、良源『九品往生義』(『仏全』二四、二四四頁上)、千觀『十願発心記』(古逸、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』二〇三頁)にも引用されている。

(2) 第二問答 『弥勒所問經』(古逸、大文第九「往生諸行」)に引用。本講読(十一)五一頁)に説く、「慈心・悲心・護法心……」等の十念と、『觀無量壽經』下々品の称名の十念との同異を問ひ、専心称名すれば自然に慈等の十念が具足するという新羅義寂『無量壽經述義記』(古逸、『安養集』卷二、八二頁)の説、經説の是非を論ずるべきではないとする懷感『群疑論』卷五(『大正藏』四七、六〇頁中)の説、慈等の十念は平生の念であり称名の十念は臨終の念であるとする迦才『浄土論』卷中(『大正藏』四七、九三頁下)の説を挙げる。この問題には古來諸説ある。たとえば元暁『無量壽經宗要』(『大正藏』三七、二一九頁上〜中)には、慈等の十念は受用土の因、称名の十念は變化土の因と見る。義寂は、この元暁の説を批判して独自の見解を提示した。源信は義寂の説の方を評価したのである。

(3) 第三問答 『無量壽經』卷上の第十八願文(『大正藏』二二、二六八頁上)に、「乃至十念」と言い、卷下の願成就文(同、二七二頁中)や下輩の文(同、

二七二頁下)に、「乃至一念」と言う。その相違について問ひ、極悪人は十念を要すという懷感『群疑論』卷七(『大正藏』四七、七二頁中〜下)の説を挙げている。

(4) 第四問答 悪業の重い者がわずか十遍の称名念仏で往生できるのはなぜか、と発問し、答えとして『那先比丘經』卷下(『大正藏』三二、七〇一頁下〜七〇二頁下)、天台『十疑論』(『大正藏』四七、八〇頁上)、道綽『安樂集』卷上(『大正藏』四七、一〇頁中〜下)の文を挙げ、加えて私見を提示している。まず『那先比丘經』には、同じ行いをして、仏法を知り知恵を得た者は、そうでない者よりも罪が軽い等と説かれる。次に『十疑論』より、いわゆる「三在釈」の文を引用する。曠劫以来の悪業の罪と、臨終に起こすわずか十念の念仏の功德との軽重を論ずるもので、「心・縁・決定」という三つの観点から、凡夫の散漫なる妄念から繰り出される悪業よりも、仏の教えを抛り所とする真実の業であり、しかも臨終の切迫した心から繰り出される念仏の方が重いと主張する。この見解は曇鸞『往生論註』卷上(『大正藏』四〇、八三四頁中〜下)に見え、道綽『安樂集』卷上(『大正藏』四七、一〇頁下〜一頁上)にも踏襲されている。しかるに良源『九品往生義』(『仏全』二四、二五六頁上〜二五七頁上)は、これを『十疑論』より引用し、源信もそれを継承している。第三に『安樂集』には、他力が働くことよって小さな力で大きな効果を上げる例を七つ挙げている。この中に見える黄鵠の喩えは、『列異伝』に出る故事である。また、「五不思議」とは、『大智度論』卷三十(『大正藏』二五、二八三頁下)に見える説で、①衆生の多少(衆生の数に増減がないこと)②業の果報(行為によって果報に差が生ずること)③坐禅人の力(禪定によって超人的な力が發揮されること)④諸龍の力(龍が一滴の水で大雨を降らせること)⑤諸仏の力(仏の教えによって衆生が悟ること)を指す。加えて源信が十種の譬喩を挙げるが、いずれも『安樂集』の譬喩を補佐するものである。これらによって、十念には他力すなわち仏力が加わっているから、常軌を超えた功德がある、と主張しているのである。

(5) 第五問答 第四問答に引き続き、臨終の心念力が一生の業力よりも強いことを主張する。『大智度論』卷二十四(『大正藏』二五、二三八頁中)の説と、『安樂集』卷上(『大正藏』四七、一一頁上)の文とを挙げている。『安樂集』は、『論註』の三在釈を引用した後、「在決定」の釈を補足する形で、『大智度論』卷二十一(『大正藏』二五、一五三頁下)の文と、卷二十四の文とを用いて、臨終十念即得往生を主張している。源信はこれを承けて、まず『大智度論』卷二十四の文の全貌を示し、次いで卷十三の文を用いて述べられた『安樂集』の文を引用

している。ただし卷十三の文を用いた『安楽集』の積は、『大智度論』の説に沿うものではない。『大智度論』は、「持戒の人は臨終に刀風が到来しても怖畏が起らない」と言う。一方『安楽集』は、「臨終の大怖畏の為に勇猛心が起こるから十念往生が可能となる」と言うのであって、この見解は、曇鸞『略論安楽浄土義』（『大正蔵』四七、三頁下）の積を継承したものと見える。

(6) 第六問答 仏号を称えるだけで無量の罪を滅することができるのはなぜかと発問し、『安楽集』卷上（『大正蔵』四七、二二頁上）と『西方要決』（『大正蔵』四七、一〇七頁中下）の文とを挙げている。『安楽集』は、仏の名号は、名（言葉）と法（働き）とが相即するからであると述べている。この議論は曇鸞『論註』卷下（『大正蔵』四〇、八三五頁下）の記述を継承するものである。「南無阿彌陀仏」という言葉を発することによって、その言葉に込められた法すなわち救済の働きが発動する、ということである。加えて『西方要決』には、仏号は因位の願行に酬報するものであり、称名によってその功德が回施されると言う。

この文はすでに大文第五「助念方法」の第三対治懈怠の項に、如来十号に込められた功德の大きさを示す証文として引用されている（本講読（七）一一〇頁）。

(7) 第七問答 『仏藏経』第三（実は卷中、『大正蔵』一五、七九四頁下〜七九五下）より、謗法の罪が永劫消えることがなかったという話を引用して、わずかに十遍の念仏によって滅罪往生を説く教説に疑問を發し、念仏は五つの縁を起動するから、滅罪往生が可能となる、と説く懐感『群疑論』卷三（『大正蔵』四七、五〇頁上、略抄）の文を挙げる。全体が『群疑論』卷三の問答を踏襲するものである。

(8) 第八問答 逆誘除取を論ずる。智憬は奈良時代、東大寺で活躍した字者で、良弁や審詳に師事した法相・華嚴学者である。浄土教にも通じ、『東域伝燈目錄』には智憬の著として、「無量寿経宗要指事一卷、無量寿経指事私記一卷」が挙げられている。いずれも逸書であるが、元暉『両卷無量寿経宗要』に註を加えたものと考えられている。『往生要集』には三箇所、智憬への言及が見える。ここに挙げられた智憬の見解は、懐感『群疑論』卷三（『大正蔵』四七、四三頁下〜四四頁上）に列挙された十五家釈の中に含まれていて、智憬が『群疑論』を見ていたことが推察される。続いて源信は『群疑論』の説を挙げ、最後に私見を提示している。本願文の「乃至十念」と、本願成就文・下輩・流通分の「乃至一念」の相違を、逆罪人の往生に関連させて解釈を試みているが、自ら未決と判している。

(9) 第九問答 第八問答に、逆罪人が十念で往生できるかどうかは定まっていなると述べた、その理由を問い、過去世の善行の有無や、臨終と平生とで、十念

力に差があるからだとする。

(10) 第十問答 五逆罪は順次に罰を受けることが決定している行為ではないのか、と問い、懐感『群疑論』卷五（『大正蔵』四七、六〇頁中下）の文を引いて答えとしている。問答ともに『群疑論』に依っている。懐感は、決定業という考え方は小乗の立場であり、大乘ではすべての行為が不定業である、と言う。文証として、父殺しの阿闍世が懺悔によって救われる『涅槃経』の教説を挙げている。前半は卷十九（青蓮院本では卷十八となっているが、その他の本では十九とあり、『群疑論』でも十九、実際にも北本卷十九、『大正蔵』一二、四七七頁下）であり、後半は卷三十一（同、五四九頁下〜五五〇頁上）からの引用である。

さらに『瑜伽師地論』を挙げるが、論の本文には該当の文が見当たらない。ただ遁倫『瑜伽論記』卷十七上（『大正蔵』四二、六九〇頁中）に、「仏は未だ解脱せざる身の凡夫に依りて定業を建立す。解脱を得る者の身に定業を建立するにはあらず。これ転じて軽く受くべきがゆゑに」という文言が見える。末尾に源信が参看を指示した『放鉢経』（『大正蔵』一五、四五〇頁中）には、「もし菩薩道家の善男子善女人、宿命の殃患未だ尽きず、死して当に泥犁中に入りて勤苦一劫すべきも、善師の教を得て悔過すること一日一夜せば、頭痛身熱諸病悉く除き尽し、また泥犁中に入らず」等とある。

(11) 第十一問答 第十問答に引用された『涅槃経』に見える、智慧によって重罪の苦を転じて軽く受けることができるという教説を取り上げ、『観無量寿経』下品人の場合は何をもって軽受と言えるのかと問う。答えとして、『観無量寿経』卷下（『大正蔵』一一、二七八頁中）より疑城胎宮を説く文を引用し、それを『観無量寿経』下品段に説く、往生の後、蓮華内に留め置かれること七七・六劫・十二劫の「胎生」に擬えている。これらを墮地獄の罪が減せられた姿と見るのである。

(12) 第十二問答 称名による滅罪の功德について、臨終と平生の差を問い、臨終は心力強大なので大きな功德があるが、平生は心念の浅深によって差があると言う。付言して、『観無量寿経』下品人の滅罪については、大文第七「念仏利益」の第五弥陀利益の項に詳しい（本講読（十一）三七頁）と言う。

(13) 第十三問答 『首楞嚴三昧経』（『大正蔵』一五、六三三頁中）より滅除業の譬喩を引き、浅心念仏にも利益のあることを言う。この譬喩はすでに本項第四問答に言及されている。

【現代語訳】

第五に、臨終念仏の様相について。

問う。『観無量寿経』に、下品下生人は臨終に「十念」して即座に往生することができると説かれる。ここに言う「十念」とはどのような念であるか。

答え。道綽は、「ひたすら阿弥陀仏の全身の様相、あるいは各部位の様相を心に想い浮かべ、それを対象として観念を凝らし、十念の間、ほかの観念がまじわらない状態を保つことを、〈十念〉と言う。また、十念の間継続せよという教説は、聖者に対する目安を示したものに過ぎない。十という数にこだわらず、ひたすら観念を積み重ね、心を研ぎ澄まして、他所へ心を移すことがなければ、たやすく往生の業因は完成する。ことこまかに念の数を数えることはない。長らく念仏の修行をしてきた者は、念の数にこだわる必要はないが、初心者は念の数を数えるのもよからうという考え方もある。これもまた聖教に見える見解である」と言う。ある者は、「ただひたすらに〈南無阿弥陀仏〉の六字を称える時間を〈一念〉と名づける」と述べている。

問う。『弥勒所問経』に説く十念往生は、一つひとつの念が深く広い。なぜ『観無量寿経』ではわずかに十遍の称名念仏で往生できると説かれるのか。

答え。諸師が様々に解釈している。新羅義寂は次のように述べている。「ひたすら心を傾けて仏の名を称える時には、『弥勒所問経』に説く慈心等の十念が自然に備わるということである。必ず慈心等の十念を一つひとつ発さなければならぬわけではない。また慈心・悲心・護法心等々を数えて十念とするわけでもない。一つひとつを数えずに十念が備わるのはなぜかと言うと、ちょうど受戒の際に三帰依文を唱えるならば、不殺生等の十戒の文を一つひとつ唱え出さなくても、三帰依の中にそれらはすべて含まれているようなものである。この道理も同様であることが知られよう。また十念を満たして〈南無阿弥陀仏〉と称えよという教説は、慈心等の十念を満たして〈南無阿弥陀仏〉と称えよということである。そのような状態で称え念ずることができれば、一遍の称名でも、たくさん称名でも、同じく往生することができるのである」と。懷感も次のように言う。『弥勒所問経』も『観無量寿経』も釈尊の教説であり、どちらも往生浄土の教えを説くものである。ともに往生の行業が正しく提示されている。どちらか一方を是とし、他方を非として斥けるなどということはしてはならない。そのようなことをすると、自分が経説を理解できないだけでなく、仏法を学ぶ多くの人々を惑わせることになる」と。迦才は言う。『弥勒所問経』の十念は平生の時に往くものであり、『観無量寿経』の十念は臨終の時に往くものである」と。この見解は懷感と同様である。

問う。『無量寿経』に、「わずかに一念に至るまで往生することができる」と説かれる。この説と、「十念」という説と、食い違っているのはなぜか。

答え。懷感が次のように言う。「悪業の極めて重い者は十念を満たして往生することができず、その他の者はわずかに一念でも往生できる」と。

問う。生まれてから今日まで、様々な悪を行い、善行など何一つできなかった者が、臨終の時にわずかに十遍「南無阿弥陀仏」と称えただけで、なぜ罪を滅ぼし、永遠に迷いの世界から逃れて、即座に浄土に往生することができるのか。

答え。『那先比丘問仏経』に次のように説かれる通りである。「その時、彌蘭王が、阿羅漢那先比丘に問うて、〈人間世界で百年間、悪を作り続けてきた者が、臨終に仏を念ずれば、死後天上界に生まれることができるという、この教えを私は信ずることができません〉と言い、また、〈たった一つでも命あるものを殺したならば、死後地獄に墮ちるといふ、この教えも信ずることができません〉と言った。比丘は王に問うた。〈小さな石を水面に置けば、石は浮かぶでしょうか、沈むでしょうか〉と。王は、〈沈みます〉と言う。那先比丘は、〈百丈もある大石を、船の上に置いたら、沈むでしょうか〉と言うと、王は、〈沈まないでしょう〉と言う。那先比丘は、〈船上に置いた百丈の大石は、船の力によって沈まないのです。悪行ばかり行ってきた者が、一度でも仏を念じたならば、地獄に墮ちずに天上界に生まれるということが、どうして信じられないのですか。どんなに小さな石でも沈むということは、悪を行った者が、仏の教えを知らずに死んで、地獄に墮ちるといふことですか。どうして信じられないのですか〉と言うと、王は、〈よくわかりました〉と言った。さらに那先比丘は言った。〈二人の人が同時に死んで、一人は色界の梵天に生まれ、もう一人は鬪寶國に生まれる、というような場合、生まれる所までの遠近は随分違ふけれども、同時に生まれます。二羽の鳥がいて、一羽は高い木の上に止まり、もう一羽は低い木の上に止まって、また同時に飛び立つと、その影は一つに見えるようなものです。愚者が悪を行うと罪は重く、智者は悪を行っても罪が軽いようなものです。地面に焼けた鉄があつて、一人はそれが焼けた鉄だと知っている、もう一人は知らずに、共にその鉄をつかんだら、知らずにつかんだ者は大やけどをするけれども、知っていた者はそれほどでもない、というようなことです。悪を行うということについても同様です。愚者は自ら悔い改めることができなから罪が重く、智者は悪を行うことがあつても、それが悪であると認知することができ、日々自ら悔い改めるので、その罪は軽くなるのです」と。十念によって様々な罪を滅ぼし、仏の悲願という船に乗って、ただちに往生することができるのも、この道理である。

また、『十疑論』に次のような見解が述べられている。〈今三つの道理によって比較してみると、悪業の罪と念仏の功德の軽重は、時間の長短や行為の多少に比例するわけではないことが分かる。その三つとは、第一に心の状態、第二に縁の関わり方、第三に決定心の有無である。第一に、心の状態を比べてみると、罪を作る際は、自分自身の誤った心が発動し、念仏をする際には、良き師の教えに従って阿弥陀仏の真実の功德がこもった名号の言われを聞く心が発動する。一方は嘘偽りの心であり、一方は真実の心である。比べようもなからう。一万年のあいだ闇に包まれていた部屋に一瞬でも日の光が差し込めば、たちまち闇が破られるようなものだ。長年の闇だから、少しばかりの光では破られないというようなことがあるのか。第二に縁の関わり方を比べてみると、罪を作る際は、無知蒙昧の心が、嘘偽りの世界の中ではたらく倒錯の心を抛り所として行動するが、念仏する際には、仏の真実功德がこもった名号を聞いてこの上ない悟りを目指そうとする心を抛り所として行動する。一方は真実、他方は虚偽である。比べるまでもない。毒矢に射られて、傷は深く、毒は烈しく、皮膚は破れ、骨にまで到達していようと、ひとたび毒消しを塗った鼓の音を聞けば、たちまち毒矢が抜け落ちるようなものである。毒が烈しければどうしても抜けないということはない。第三に決定心の有無を比べてみると、罪を作る際には、散漫な心、後に挽回の余地があると思う心が働くが、仏を念ずる際には、専一の心、もう後がないという心が働き、命の終わる瞬間まで善の心が猛烈に働き続ける。だから速やかに往生できるのである。十重に編んだ縄は、千人の男が引っぱってもちぎれないが、子供が剣を振るえば一瞬で真つ二つになるようなものである。また千年のあいだ積み上げた草でも、豆ほどの火をつければ、すぐに燃え尽きるようなものである。また一生のあいだ十善業を行って天上界に生まれるべき者が、臨終の一瞬に仏法に背くような考えを起こしたら、即座に阿鼻地獄に墮ちるようなものである。嘘偽りの心が起す悪業でさえも、臨終の際には大変な威力があるので、一生のあいだ行ってきた善行の報いをすべて台無しにして、悪道に墮ちるのである。まして猛烈な威力をもつ臨終の心で仏を念ずるといって、真実にして専一の善なる行為はなおさらである。永遠の過去から現在に至るまでのすべての悪行の報いを消し去って、浄土に往生することができる、ということが言えなければ、道理が通らないだろう。〉と。

また『安楽集』には七つの喩えを挙げて、この道理を説明している。「第一に、小さな火の喩えは、『十疑論』にあった通りである。第二に、足の不自由な者でも、船に乗れば、風と帆のおかげで一日に千里行くことができる、ということ。

第三に、貧しい者がちょっとしたものを手に入れて王に献上したところ、王が慶んで山のような褒美を与え、あつというまに金持ちになった、という話。第四に、つまらない者でも、転輪聖王の行列に参加すれば、空を飛んでどこでも行ける、ということ。第五に、十重の縄の喩え。これも『十疑論』にあった。第六に、鴉鳥という毒鳥が水に入ると魚介はみな死んでしまうが、犀の角を触るとみな生き返る、ということ。第七に、子安に助けられた黄鶴が、子安の墓前で「子安、子安」と三年間鳴き続けたところ、子安が生き返ったという話。墓に入って千年を経ると決して生き返らない、とは言えない。あらゆる事柄は、自分の行いと他者の行いと絡み合っており、その組み合わせは無限にあって、無数の事象を現出する。限られた範囲だけしか認識できない我らには、無限の智慧をもつ仏の教えを疑う資格はない。いわゆる五つの不思議の中でも、仏の教えによって悟りを得ることが最も不可思議なことである。迷いの世界の煩惱によって繰り出される行いを重視し、仏の説く念仏の教えを疑って軽視するなどということはあってはならない」と。

これに加えていくつかの喩えを示そう。第一に、栴檀の木の芽が出ると、四十由旬四方の伊蘭の林が放つ悪臭を抑えて、一面が良い香りに包まれる。第二に、師子の筋肉でつくった絃を張った琴をひとたび奏でると、ほかの琴の絃はすべて断ち切れてしまう。第三に、錬金術の秘薬が一斤あると、千斤の銅が金に変わる。ダイヤモンドは硬いけれども、カモンシカ角で叩くと水のように割れる以上は滅罪の喩えである。第五に、ヒマラヤ山中に忍辱という草が生えている。牛がこれを食べると、醍醐という最高級の乳製品ができる。第六に、やはりヒマラヤに生えている沙訶陀薬という香草は、ただ見るだけで無限の寿命が得られ、心に念ずれば前世のことを知る知恵が得られる。第七に、孔雀は雷を聞いて懐妊する。第八に、尸利沙の木は屍屋を見れば果実を結ぶ以上は生善の喩えである。第九に、如意宝珠を飾りとして身につけていけば水に入っても溺れることがない。第十に、砂や小石はわずかでも水に浮かぶことはないが、いかに大きな岩石でも船に乗せれば水に浮く以上は総括的な喩えである。物事が生ずる際に働く力は、このように思量しがたい。念仏の功德も同じである。仏説を疑ってはならない。

問う。臨終に起す心念の力がどれほど強いから、往生極楽などという大事を成し遂げられると言うのか。

答え。臨終の心念力は百年分の行為の力よりも強い。だから『大智度論』に、「臨終の心念は、時間は短くても、心の力が強烈なので、火や毒のように少量で大きな働きをする。死に臨む人の心は、ぶれることなく強く正しいので、百年間

の行為の力よりも強い。最期の心を大心と呼ぶが、それは身体や諸器官を捨て去ることによって、心が切迫するからである。敵陣に入ったら、命をなげうつことよって強い人と呼ばれるようなものであり、阿羅漢が、自分の身体に対する執着を捨てることによって悟りを得るようなものである」と説かれている。この經説によって『安樂集』は、「あらゆる人々は臨終の時、身体を切り刻まれるほどの苦しみが迫り、大きな恐怖に襲われる。だからこそ即座に往生することができるのである」と述べている。

問う。深い観念の力が罪を滅ぼす、ということは理解できる。どうして仏の名を称えるだけで無量の罪を滅ぼすことができるのか。それはちよとど、「あれが月だ」と指さす時、その指が闇を破る働きをした、と言うのと同じだろう。

答え。道綽が次のように述べている。「世の中の現象は様々で、一概には言えない。言葉とその働きとが一致するものもあれば、そうでないものもある。一致するものの例としては、諸仏・菩薩の名号や、まじないの呪文、經典の言葉などである。「日出東方午赤乍黄（お日様昇って赤い黄色い）」という病封じの呪文は、お日様の出ていない夜に唱えても、病気が治るようなものである。犬に噛みつかれた時、炙った虎の骨を患部にあてるとすぐに治るが、虎の骨がない時には、掌を広げて擦り合わせ、それを口に当てて「虎よ来い、虎よ来い」と唱えるだけでも治る。また「こむらがえり」をおこした時には、炙った木瓜の枝を患部にあてると治るが、木瓜がない時は、手を炙って擦り合わせて「木瓜」と唱えるだけでも、やはり治るようなものである。言葉とその働きとが一致しないのは、指で月を指し示すような場合である」と、『西方要決』には、「諸仏は、自らの願いと、その願いを実現するための修行の成果として、名号を得られたのだから、我らはただその名号を念ずることによって、仏の功德をすべて頂戴することになる。だから称名は大いなる善行なのである」と述べられている『西方要決』には『維摩經』「戒婁論」の文が引用されている。詳細は助念方法の章を見よ。

問う。五逆の罪を犯した下品下生の悪人が、たった十遍、仏を念じただけで往生できる、と言うならば、なぜ『仏藏經』第三に次のように説かれるのか。「大莊嚴仏が入滅された後、四人の悪比丘がいた。仏の教えを捨てて、ジャイナ教の祖ニガンダの教えに執着した。死後は阿鼻地獄に墮ち、焼けた鉄板の上で、仰向け・うつ伏せ・左向き・右向きにそれぞれ九百万億年ずつ焼かれて黒こげになって死に、さらに灰地獄・大灰地獄・等活地獄・黒繩地獄に生まれて、それぞれに同じ年月の間苦しみを受けた。黒繩地獄の命を終えるとまた阿鼻地獄に生まれて、苦しみをくり返した。彼らと親しくしていた在家・出家や、彼らの信者たち、あ

わせて六百四万億の人々も、彼らとともに生死を繰り返して、大地獄に墮ちて身を焼かれた。何劫もの時間を経て地獄から地獄へと転生し、ようやく人間世界に生まれることができて、五百回もの生死を繰り返して辛酸をなめた。その後、一切明王仏に出会って出家し、十萬億年の間わき目もふらずに修行につとめけれども、聖者の境地に至ることもできなかった。まして悟りを得るなど到底できずに命終わり、また阿鼻地獄に戻った。その後九十九億の仏に出会っても、やはり聖者の境地には至れなかった。それはなぜかという、仏が深い教えをお説き下さったのに、それを信じず、否定し、聖者・修行者を傷つけ誇った、そのためである。極めて当然のことと言えよう」と以上は省略して引用した。四人の比丘は、善岸比丘・薩和多比丘・持去比丘・跋難陀比丘を指す。十萬億年の間わき目もふらずに修行につとめても、罪は滅びずに、また地獄に墮ちたと言うのに、どうして一遍あるいは十遍ばかりの念仏で、即座に罪を滅ぼし浄土に往生するなどということができるとか。

答え。懐感は次のように述べている。「仏を念ずると、次の五つの縁が働くから罪が滅ぼされるのである。その第一は大乗仏教の菩薩の心を発すという縁、第二には浄土に往生したいと願う縁である。小乗仏教の人は十方世界の仏の存在を信じないからである。第三に阿弥陀仏の本願の縁、第四に念仏の功德の縁である。『仏藏經』の四比丘は四念処觀を修しただけで念仏はしなかったのである。第五に仏が大いなる力によって念仏の行者を支えて下さる縁である。だから念仏によって罪が滅ぼされ、浄土に往生することができるのである。小乗の人にはこれらの力は働かないから、罪を滅ぼすことができなかったのである」と。

問う。それならばなぜ、『無量壽經』に十念による往生を説く際に、「ただし五逆罪を犯した者と、仏の正しい教えを謗る者とは除外する」と言われるのか。

答え。智憬等の諸師は、「五逆罪だけの者は十念によって往生することができるが、五逆罪を犯した上に、仏の正しい教えを謗る罪を重ねた者は往生することができない」と言う。また、「五逆罪の報いを受ける時期が未定の者は往生できるが、決定の者は往生できない」等々、十五家の説があるという。懐感はその列挙したのち、いずれにも依ることなく独自の見解として、「逆罪を犯さなかった者は、念仏の数は問われない。一遍でも十遍でも浄土に往生することができる。逆罪を犯した者は、必ず十遍を満たさなければならぬ。一遍でも不足すれば往生できない。だから（除外する）」と説かれるのである」と述べている。一試論として私の見解を付け加えておこう。本願文以外の箇所では、色々な種類の往生人が余すことなく紹介されているが、本願文では必ず往生できる者だけが挙げられている。だから、「これが実現しなければ、私は決して仏の位には就かない」と

誓われているのである。逆罪を犯さなかった者は十念で必ず往生できる。逆罪人は一念では決して往生できない。それは決定している。しかし、逆罪人が十念で往生できるかどうか、また逆罪を犯さなかった者が一念で往生できるかどうか、それは決定していない。だから本願文では、逆罪を犯さなかった者の十念往生を誓い、本願文以外の箇所では、逆罪人の十念往生と逆罪を犯さなかった者の一念往生とを説いているのである。この論義は未だ結論に至っていない。さらに研究せよ。

問う。逆罪人が十念で往生できるかどうかが定まっていけないのはなぜか。

答え。過去世における善行の有無によって十念の力に差が生ずるからである。また臨終時の十念と平生の十念とでは緊迫感に差があるからである。

問う。五逆罪は次に生まれかわった時に必ず報いを受けるべき行いである。その報いとしての罰も、それを受ける時期も決定している。どうしてその罪を滅ぼすことができるか。

答え。懐感がこの問題について次のように述べている。「小乗の教えでは、因果応報を信じない愚か者のために、仏が方便として、〈罪の報いが決定している罪がある〉と説かれることもある。しかし大乘仏教では真実の教えとして、〈すべての行為の報いは定まっていけない〉と説かれる。『涅槃経』の第十八巻には、菩薩が阿闍世王に懺悔の法を説いて、〈これで罪を滅ぼすことができます〉と言いつつ、続いて、〈釈尊は、一の善心が百の悪を滅ぼす、と説いていらっしやいます。わずかの毒薬が人を殺すのと同様、わずかの善が大きな悪を滅ぼすのです〉と述べている。また『涅槃経』第三十一巻には、〈お前たちの中には、因果応報の教えを軽んじて信じない者がいる。そんな者たちを救うため、私は、すべての行為を軽と重との二つに分け、さらにそれぞれに報いが決定している行為と、決定していない行為とがある、と説く〉とあり、また、〈重い行為であっても報いが軽いものもあり、軽い行為でも重い報いを受けなければならないことがある。智慧のある人は、智慧の力で、地獄に堕ちるべき罪を今生で軽くつぐなうことができるが、愚か者は、今生で簡単につぐなえる罪で地獄に堕ちることもある〉と言いつつ、阿闍世王は懺悔によって地獄に堕ちることはなかったし、鷲掘摩羅は阿羅漢の悟りを得た。『瑜伽師地論』に、〈いまだ悟りを得ていない者の場合は、罪の報いは決定していると説き、すでに悟りを得ている者には、決定していないと説かれるのである〉と言ように、多くの大乘経論には、五逆罪などはすべて報いの決定していない行為であり、罪を滅ぼすことが可能であると説かれる」と重い罪の報いを軽く受けることができるということは、『放鉢経』に見える。

問う。前掲の经文に、「智慧ある者は、重い罪の報いを軽く受けることができる」と言う。「観無量寿経」下品下生人は、ただ十遍の念仏をしてすぐに浄土に生まれると説かれるが、彼はどこで罪を軽減されると言うのか。

答え。『無量寿経』に、「胎生」の形で浄土に生まれる者のあることを説いて、「五百年の間三宝に会うことができず、供養することも、善行を積むこともできない。それが彼らの苦しみであり、他所に業ある所を見つけても、そこに行きたいとは思わない」と言う。この説になぞらえて『観無量寿経』の教説を見ると、下品上生人は七七日の間、下品中生人は六劫の間、下品下生人は十二劫の間、仏に会うことができず、説法を聞くこともできない。これをもって苦の軽減と見ることができよう。

問う。『観無量寿経』には、臨終の時に一遍、仏の名を念ずると、八十億劫の罪を滅ぼすことができると言うが、平生の行者も同様であるのか。

答え。臨終の心は力が強いので、無限の罪を滅ぼすことができるが、平生に仏名を称えても、同じようにはいかない。しかし観念が成就すれば、無限の罪を滅ぼすことができる。仏名を称えるだけならば、心念の浅い・深いによって利益に差が生ずる。くわしくは第七「念仏利益」の章に述べた。

問う。心念の浅い念仏にも利益があることは、何によって知られるのか。

答え。『首楞嚴三昧経』に、次のように言う。「〈滅除〉という名の薬がある。薬の王様だという。戦争の際に鼓の塗っておけば、矢に当たっても、刀剣で切られても、鼓の音を聞けば、たちどころに矢は抜け、毒が除かれる。それと同様、菩薩が首楞嚴三昧に入っている時に、その菩薩の名を聞くと、貪り・怒り・愚癡の矢が自然に抜け、邪見の毒がすべて消え去り、あらゆる煩惱が制御される」とあらゆるものの真実のすがたを觀じ、凡夫の見解と仏の教えとが別々のものではないと知見することを、首楞嚴三昧の実践と名づける。菩薩の名でもそうなのだから、まして仏の名はなおさらであり、聞くだけでも大きな利益が得られるのだから、念ずればなおさらである。これによって、たとえ心念の浅い念仏にも利益があることが知られよう。